

町田市立国際版画美術館 紀要
第28号

「幻想のフラヌール—版画家たちの夢・現・幻」展 関連イベント

記念対談 谷川渥 × 相馬俊樹

日 時：2024年6月22日(土) 14時～15時30分

場 所：町田市立国際版画美術館・講堂

登 壇：谷川渥(美学者) 相馬俊樹(美術評論家・企画協力者)

司 会：藤村拓也(担当学芸員)

藤村

「幻想のフラヌール—版画家たちの夢・現・幻」展(以下、本展)を担当しました司会進行の藤村です。本展は当館の収蔵品をもとに構成を考えていましたが私だけではなかなかうまくまとめることができず、相馬先生には今回、本展の協力者としてご尽力いただきました。またイベントについても相馬先生に相談しましたところ、本展の出品作家についてご著書で触れられている谷川先生のお名前が挙がりまして、ぜひお二人にお話しいただきたいと思い、今回の対談となったしだいです。早速となりますが、展覧会や出品作についてお話しいただきます。まず相馬先生から、どうぞ宜しくお願いいたします。



展覧会チラシ(表・裏)

相馬

企画協力者である私一人が講演をするという形では少し不安があり、いつもお世話になっている谷川先生をお招きさせていただきました。谷川先生は、「幻想」という

ものになりに深く関わられています。まず『幻想の地誌学』¹という本を出されていますし、シュルレアリスムやマニエリスムといった「幻想」にかかわりのあるテーマを追及されています。今回の展覧会のコンセプトである「幻想」は、文学においても芸術においても、瀧口修造²や澁澤龍彦³らが深めていったテーマで、一般にも定着して今日に至っています。ただし、現状では消費されつくして、今更「幻想」ではないだろうという面もあるかもしれません。簡単に言うと、瀧口・澁澤らが開拓した「幻想」というものを再検証して蘇生させよう、というのが今回の展覧会のコンセプトです。



相馬俊樹氏

日本の現代美術における「幻想」はまだ歴史化されておらず、現在も進行形で若い作家たちが同じテーマを紡いでいるという状況です。いまだ動き続けているテーマ

で、総括された形での全体像というものを提示するのは難しいけれども、だからといって展覧会を無秩序にやるわけにはいかないと話しあうなかで、全体像を体系的に把握するのではなく、重要な傾向／観点を提示する企画にしようということになりました。そこで核となるベクトルをどうするかというところで挙がったのが「フラヌール flâneur」という言葉です。

「フラヌール」とは、パサージュという19世紀のパリのアーケード街をふらふらとさまよう遊歩者のこと。たとえばベンヤミン⁴が、有名な詩人ボードレール⁵をフラヌールと見なしています。我々も豊穡な幻想版画の世界をさまよう中で重要な傾向／観点を拾い上げていこう——まずは企画者がフラヌールとして、そして鑑賞者の方たちもフラヌールとしてさまようことができる展示空間にしよう、という話になったのです。

展示はいくつかのコーナーに分かれています。一例として門坂流⁶の作品【図1】が出品されている「刻線の魔力」が、どのような傾向／観点であるかについて。彼は樹や水の流れといった自然を描いただけなんだけれども、我々が日常で目にする自然とはちょっと異なった印象を受けます。こういったタイプのものも新しい意味で「幻想」としてとらえてみよう、ということです。

精神医学者の木村敏⁷によると、現実の捉え方は「リアリティ」と「アクチュアリティ」に分けられるそうです。「リアリティ」は、我々の日常の目であったり自然科学の目であったり、自然を対象化あるいはモノ化する捉え方。でも我々にとって重要なのは、実は生きていて動いている自然に心身を投じて感じ取る捉え方である「アクチュアリティ」ではないのか——このように自然に対する日常とは違った視点に気づかせてくれる作家たちを「刻線の魔力」のコーナーで取り上げています。



【図1】門坂流《縄文杉》2009年
エングレーヴィング、町田市立国際版画美術館蔵

ところでちょっと唐突なのですが、有名な幻想文学作家のボルヘス⁸がスウェーデンボリ⁹という17、18世紀の神秘家を取り上げています。スウェーデンボリの伝える死後の世界はかなり特殊で、まず人間は死んだことにそもそも気づかない。その世界はほとんど現実と変わらないので気づかないまま数日経つけれども、しばらくするとちょっと違うことに気づく。というのも、スウェーデンボリによると死後の世界の方が生き活きとしており、また明晰かつ濃密であるため、生きていた時の現実の方が影のようだから。スウェーデンボリは死後の世界と言っていますが、おそらくこれは彼が見た「幻想」だと思うんですね。

つまり「刻線の魔力」に並べた作家たちは、現実を濃密に表しており、その作品世界は明晰かつ生き活きとしているのではないのか——このように現実を突き詰めたり、加速させたりする「幻想」もあるのです。このような「幻想」は、瀧口や巖谷國士氏¹⁰も指摘している「超現

実」につながると思うのですけれども、谷川先生いかがでしょうか。

谷川

「幻想のフラヌール」というタイトルの「幻想」には、「visionary」が当てられていますね。直訳すると「幻視的」で、幻想という言葉はもともと日本では「fantastic」の翻訳ですね。1960年代に澁澤龍彦が『幻想の画廊から』¹¹を刊行し、マルセル・ブリヨン¹²の『幻想芸術』¹³も翻訳された。そして1970年代にはロジェ・カイヨワ¹⁴の『幻想のさなかに』¹⁵が翻訳されて、立て続けに幻想論というものが出てきました。



谷川渥氏

では「fantastic」とは何かというと、ギリシャ語の「phantasia」から来ている。英語では「fantasy」という言葉になりましたが、もともとは心の中に抱くイメージ、心的表象という意味で「imagination」と言ってもいいぐらい。また「幻影」と訳される「phantasma」というギリシャ語は、水や鏡に映った像や、アイデアの写しである個物を絵にしたもの。プラトンのアイデア論によれば、鏡像や絵画は同じ存在論的なレベルにあり、不完全と考えら

れてきた。だからこそ「幻像」なのだけれども、「シュルレアリスム」が登場してきます。「超現実主義」と訳されていますが、現実を超えたところに何かがあるというわけではないのです。例えば、妖精を描いたからって幻想絵画という話ではない。相馬さんがスウェーデンボリを挙げましたけれど、あの世だから「幻想」というわけではない。

つまり「シュルレアリスム」は、現実を超えるという意味ではないのです。瀧口や巖谷氏も述べていますが、現実を突き詰めるという意味での「“超”現実主義」であって、一つのコップも“超”現実となりうる。門坂流の《縄文杉》もただの木ではなくて、よく見ると顔のような模様が見えるけれども、だから「幻想」というわけではありません。現実以上にリアルに、“超”現実的に木を描いたからこそ幻想的に見えるわけです。

さらに「fantastic」にかんして言えば、16世紀にイタリアのグレゴリオ・コマニーニ¹⁶が「幻想模倣 imitazione fantastica」という言葉を作り出しています。この時に彼が思い浮かべていたのがアルチンボルド¹⁷でした。人の顔を肖像画として写實的に描くのが「絵画模倣 imitazione icastica」で、アルチンボルドのように様々なものを寄せ集めて顔を作り上げるのが「幻想模倣」で、マニエリスムからバロックにかけて流行しました。

このように「寄せ集めて」何か作ることにかんする言葉として、「カプリッチョ capriccio」というイタリア語があります。音楽では奇想曲とか狂想曲と訳されますが、色々なものを寄せ集めてくるという意味では風景画も「カプリッチョ」です。例えば、ユベール・ロベール¹⁸の風景画では綺麗な森の中に、ローマ時代の廃墟が点在しています。実際の目の前の風景を描いているわけではなく、どこかで見た廃墟を描き込んでいるのです。そして

コマニーニの「幻想模倣」も「カブリッチョ」の一種です。このように「幻想」とは何かを考えると様々な問題が出てくるけれども、今回は「幻想」と版画の問題です。

相馬

先ほどの「“超”現実主義」は、たとえば「超スピード」で使われる“超”ですね。超越ではなく。

谷川

ええ。シュルレアリスムは、リアルなレベルを越えるわけじゃなくて、リアルな面を突き詰めていく——オートマティズム(自動記述)は絵画ではないと批判したピエール・ナヴィル¹⁹に対して、アンドレ・ブルトン²⁰が『シュルレアリスムと絵画』²¹を書きましたが、彼は「シュルレアリスム“の”絵画」という言葉を使ったことはありません。あくまで「シュルレアリスム“と”絵画」。そこで最初に挙げられているのがピカソ²²であり、褒め称えている。逆にブルトンが一番嫌っていたのが一時期は仲間だったダリ²³で、マグリット²⁴も認めていない。

このようにまず何が「“超”現実」かという問題があるのだけれども、澁澤はダリもマグリットもバルテウスも全て『幻想の画廊から』の中で緩くまとめている。

相馬

澁澤のシュルレアリスム理解というのは、基本的にジョルジュ・バタイユ²⁵が『エロスの涙』²⁶で指摘したマニエリスムの現代版だということを踏襲していますよね。バタイユが選んでいる具象的な絵っていうものを澁澤は好んでいるのでしょうか。

谷川

基本的に澁澤の好む美術はマニエリスムですね。そし

てマニエリスムは「線」の芸術で、版画もまさに「線的」なもの。不思議でぼんやりした絵だから「幻想」であると考えるのは大間違い。

相馬

(同意しながら)各作家に対する私の方の「幻想」観については展覧会の小冊子の中で書いていますので、谷川先生から展覧会へのコメントをいただけますでしょうか。

谷川

会場にいらっしゃる多賀新氏²⁷、星野美智子氏²⁸、西村沙由里氏²⁹ら、私がかかわったことのある作家を中心に紹介しようと思います。

専門家の前で言うことじゃないけれども、版画というのは版材によって違う。木版、銅版、石版(リトグラフ)、シルクスクリーン。形式的には、凸版、凹版、平版、孔版。版材と版の形式によっていろんな違いがある。銅版でも腐食液を使う場合と使わない場合がある。そういった版材と版の形式の違いによって、僕が今まで紹介した作品についてお話しします。

まず、ホルスト・ヤンセン³⁰。毎日セックスをするように絵を作るといった人です。版画からドローイングから、版の形式もお構いなく、木版も銅版もシルクスクリーンも石版も全部やっています。彼は画狂人こと北斎に私淑して毎日制作していたためか、未だに作品の全貌がわからない伝説的なアーティスト。狂気の人材画家と言ってもいいかな。人間も植物も描いているのですが、全部枯れたような死んでいるような、朽ち果てた姿をしている。それを死ぬまでやり続けました。

次に日和崎尊夫³¹。もう亡くなられた僕の好きだった木

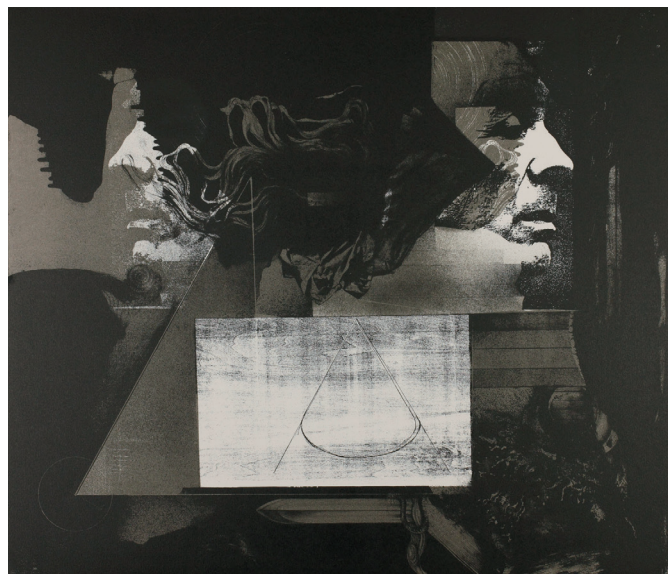
口木版家です。木を垂直に切るのが板目木版ですが、幹ごと水平に切ってその面に彫るのが木口木版。非常に硬いので、ビュランで彫っていく。小さな面に線を刻んでいくという、非常にサディスティックな行為です。非常に自閉的な空間でひたすらに版面をいじる——もともと版画というものはサドマゾ的な行為だと思います。削ったりするのがサディスティック、どんなに計算しても刷るまで完成がわからない、絵画とはちょっと違った待ちの時間がある部分がマゾヒスティック。サドマゾな行為が入り混じっているところが非常に面白い。

木口木版の場合、自分が彫った版面が紙に出てくるので、偶然性があまり関与しない。ひたすら自閉的に彫り続ける。僕は「星と薔薇」³²というエッセイを書きましたが、黒い空に白い星を置くように白い線で小さな宇宙を作っている。彼は1970年に『薔薇刑』という版画集を出した。1970年は三島由紀夫³³が死んだ年ですね。たぶん彼を意識したのでしょう。展覧会には日本を代表する柄澤齊氏³⁴の木口木版もありましたね。

続いて清原啓子³⁵。彼女は30歳ほどで亡くなった天才的な銅版作家で、30点ほど作品を遺して亡くなってしまいました。文学好きな人で、作品の背景には文学作品があるらしいのですが、我々は見ただけではわかりません。リチャード・ダッド³⁶というイギリスの狂気の画家がいて、突然父親を刺殺して精神病院に入ってからずっと絵を描き続けた妖精画家。そんな彼に彼女は私淑していた。《リチャード・ダッドに》という作品もある。この人は銅版画で面白いものをたくさん作っているんですよ。版画集が一冊出ていて、僕もそれで知ったんですけど。

そして星野美智子氏の作品です【図2】。リトグラフの

特徴は版を刻まない。油と水の関係で、描いたものがそのまま写し取られる。星野さんの作品は、ボルヘスの作品と非常に関わりがあり、「場」「記憶」「時」の形式をテーマにしている。ボルヘスの世界は基本的に黄土色で白っぽい砂のような世界ですけれども、星野さんは闇の中に記憶や時間が詰まった世界——そこではかたちが崩れて、全てが朽ちていく。黒と白が効果的に用いられて闇が見えてくるリトグラフを作り続けています。



【図2】星野美智子《ボルヘス・スフィンクス》1987年
リトグラフ 町田市立国際版画美術館蔵

最後に瀧口修造とのつながりで、アンティエ・グメルス氏³⁷。瀧口が『妖精の距離』という詩画集を出しているのですが、それを見た彼女は衝撃を受けてシルクスクリーンを作っています。

相馬

谷川先生は雑誌『太陽』の瀧口修造特集に「版の精神」³⁸を寄稿されています。先生によると、幼少期の瀧口修造は写真の現像の際に像が現れてくる動き／運動というものに感銘を受けており、谷川先生はこれが瀧口修造の原

点なのではないかと。先ほどの木村敏の話にもつながりますが、リアリティではなくてアクチュアリティとしての「像の現れ」ということと、その「版の精神」についてお話しいただけますでしょうか。

谷川

「版」という言葉がとても重要だと思っています。先に話した澁澤龍彦と瀧口修造は一見言説が似ているけれども全く違う。瀧口はブルトンに憧れてデカルコマニーなんかをやりましたが、写真に大変こだわっていた人。父親が写真を撮っていて、子どもの頃に現像をやったそうです。像が現れてくる瞬間を見て衝撃を受けてからずっととらわれていて、芸術というのは像が現れる瞬間をとらえることだってというのが彼の芸術論の基本。瀧口は芸術のことを影像の化学と呼んで、版画の延長線上だという理論を展開し、版の問題に非常にこだわっています。実際にデカルコマニーもやっています。

また詩画集も出しています。有名人を捕まえてはもっともらしい詩をかいていてなんか嫌だなあなんて思ったりもしますが(笑)、彼は人間をひとつの版—人間関係を版として見ていたのだと思います。デュシャン³⁹やミロ⁴⁰といった人間に出会って自分自身がどのように応対していくか—そういうかたちで彼は人間関係を作っている。僕は瀧口の版の精神を「うつしの美学」という言葉で呼んでいるんだけど、「うつす」という日本語は多義的な言葉ですよね。映像の「映」もあるし、場所の移動の「移」もあるしいろいろある。芸術の問題というのはその「うつす」ということなんじゃないかなって気がしていて、自然の模倣という西洋的な概念とは少し違うと考えています。

相馬

瀧口修造と澁澤龍彦は違うという話が出たところで、今回の展覧会のメインビジュアルになっている多賀新氏の作品に移りたいと思います。

澁澤となると、やはり人形—ハンス・ベルメール⁴¹—四谷シモン氏⁴²の話になりますが、僕自身がベルメールの評伝⁴³を翻訳してわかったのは、彼自身は人形を2体、というか1.5体しか作っていない——つまり1体目の人形を2体目に再利用しているのです。彼の芸術活動を総合的に見ると、人形作家というよりもむしろ版画家と言ってよいのではないか。版画家としてのベルメールは緻密な線と、未来派の「スーパーインポジション(二重写し)」というテクニックを駆使しています。

谷川

相馬さんが触れたベルメールの人形の球体関節は、人間についている関節を球体にして稼働させるっていう意味じゃないんです。彼の言う球体関節は、もともと関節じゃないところを分節するということ。1935年のシュルレアリスムの季刊誌『ミノトール』に、人形の解剖図のようなものを発表しています。その前からドイツでいろいろやっていましたが、同時期にジャック・ラカン⁴⁴が「寸断された人体」という概念を発表しています。シュルレアリスムはラカンにかなり影響を受けていて、身体を部分化する概念が流行しました。ベルメールは後に『イマージュの解剖学』という本を出していて、種村季弘が翻訳しています⁴⁵。ここには関節を球体にするなんて書いていない。あるのは人間の身体の部位の性感帯を移動させる、各部位を恣意的に切断して結合しなおすような話をずっと展開している。言語学でいえばアナグラムのように、勝手に身体を切ってまた接合しなおす—まさにイマージュの解剖学です。

相馬

ジャック・ラカンは『イマージュの解剖学』を絶賛したんですね。『イマージュの解剖学』に影響されて「寸断された身体」が生まれたのでしょうか。

谷川

1930年代にラカンは「寸断された人体」⁴⁶を発表しているので、『イマージュの解剖学』が後ですね。シュルレアリスムへの影響大で、マグリットも分断した絵を描いていたし、ダリの作品もそう。ジャック・ラカンはシュルレアリスムとともに出てきた人。

相馬

「寸断された身体」について簡単に説明を。人間は生後三、四か月頃まで身体が構成されているということがわからない。自分の身体を組み立てるというのができないのです。たとえば、母親の乳を吸うとき、母親の乳房だったり自分の身体だったり口だったり統合されていない危険な状況である時期です。それがやっと少しだけ統合されるのが鏡像段階。鏡を見て母親や父親などが「これがあなたよ」と言った段階で初めて人体が統合されます。

しかし、まだイメージを介しての自分の統合が非常に心もとない状態で、たとえば同じくらいの子供と一緒に走っていて片方が転んだら、たがいに鏡像なので自分が転んだと思って痛みを感じることもある不安定な時期でもあります。最終的になんとか自分が構成される時期というのが、言語など象徴的なものをひきうけた段階で、そこでやっと自分というものを理解できるのです。精神分裂病であったりパラノイアであったりする人々は、鏡像段階に回帰したり、最悪の場合は寸断された身体に戻ってしまうといわれます。

谷川

僕の『鏡と皮膚』⁴⁷という本の一章がまさに「寸断された身体」ですので、よろしければお読みください。



【図3】多賀新《不安な室》1973年
エッチング、アクアチント、メゾチント 町田市立国際版画美術館蔵

相馬

ベルメールに戻させていただくと、彼の版画を受け継いだのは、近年の版画家でいえばやはり多賀新氏だと思います【図3】。多賀氏は人形も含めてベルメールを非常によく研究なさっているんじゃないかと。実際に多賀氏がベルメールに会いに行ったら、ちょうど約束したその日にベルメールが亡くなってしまったというお話をうかがったことがあります。

谷川

多賀氏の作品は江戸川乱歩文庫の全表紙を飾っていますし、僕が『孤独な窃視者の夢』⁴⁸っていう、萩原朔太郎とか江戸川乱歩だとかについて書いた本の表紙にも使わせていただきました。

でも多賀作品は、ベルメールに似て非なるもので様々な手法を使っている。相馬さんが触れられた「スーパーインポジション(二重写し)」であるとか。拡大したり、

縮小したりとか。フロイト的な圧縮と置換とか。性感帯の移動だとか、空間を歪めるとか。もう色んなことをされていて、分析が大変ですね。ちなみに多賀氏はご自分で予めイメージがあってお作りになるのか、それとも刻んでいるうちに色々勝手に手が動くのでしょうか。

多賀

途中でどんどん手が動いていきます。

谷川

そうなんですね。やはり手が導いていくって言うか、線が導いていくって言うのかな。線が持つ想像力だと思うんですね、特に版画というものは。やっぱり刷って出来上がってみないとわからないし、ある種の偶然性みたいなものが入ってくる。

「幻想」も「線的」だと思うんですね。ぼーっと霧みたいのがかかっていたら幻想的だってよく言うけど、それを生みだそうとする場合は、ぼーっとしたものを作っちゃいけない。非常に細部がリアリスティックじゃないと「幻想」にならない。版画はとりわけそうでしょう。

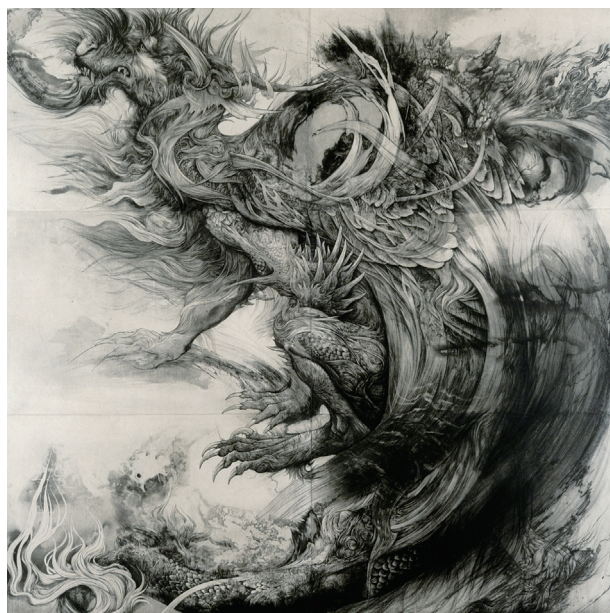
相馬

そうですね。

谷川

たとえば、今日来場している西村氏はひたすら龍を描いている【図4】。先ほど妖精を描けば幻想であるわけじゃないと言いましたが、龍を描けば幻想であるわけでもないんです。その描き方なんです。相馬さんが紹介した門坂氏にも匹敵するような“超”リアリズムと言っている。そういうものがないと、幻想的な作品としての迫力がないですね。これは西村作品のなかでも一、二を争

うんじゃないですか。



【図4】西村沙由里《山越え》2012年
エッチング、アクアチント、ドライポイント
町田市立国際版画美術館蔵

相馬

これは賞を取った作品ですね？

西村

そうです。2012年の第37回全国大学版画展の受賞作品です。

谷川

多賀作品に話に戻すと、彼の作品を図像学的に「これが手です」とか「ペンを持っています」とか言ってもしょうがないけれども、今の美術史は違う。作品そのものを問題にしない。前から僕は図像学ばかりはやめろと言っています。大学の美術史の授業は「マリアの衣服がどう」とかそんなことばかりやってる。全国の大学の美術史の授業がほとんどそれです。

相馬

パノフスキー⁴⁹もそうでしょうか。

谷川

パノフスキーはちゃんと作品を見てますけどね。美術史が安易な図像学的な問題にばかりになってしまっていて、「闇の中から手が出ています」や「目が大きく描かれています」程度のことしか言えない。

そんななかで最近読んで大変感心したのが、フランスの哲学者ディディ＝ユベルマン氏⁵⁰のフラ・アンジェリコ⁵¹の《受胎告知》についての一冊⁵²です。

受胎告知っていうのは図像学的に言えば、左側に天使ガブリエル、右側にマリアがいて、天使が窓から入ってきて「マリア喜べ、お前は神の子供を身ごもった」って突然言うわけです。身に覚えのないマリアは、「えっ」と身を反らして驚く。マリアはその時にすでに、白い衣服の場合もあるけども、図像学的に言うと、天と関係している色は青なんで青の衣服を身に着けて、お腹の中の子供への愛を表す赤を身につけてるとか。そういうことを言うのが図像学です。

フラ・アンジェリコの絵では、マリアと天使の間に殺伐とした空間が広がっている。何も描かれておらず、がらんとして何にもないので、図像学的には「こちら側がガブリエルで、こちら側がマリアで、受胎告知してます」としか言えないんですよ。

けれども、それでいいのかということで、ディディ＝ユベルマン氏は本を一冊書いている。彼はこの何もない殺伐とした空間に、この絵の意味があるとしている。彼が持ち出しているのは結局フロイトなんだけどね。つまり、絵っていうのは一つの「症状」だというのが彼の考え方で、それをどうにか考察しようとする。結局そこに帰着してしまうのかという問題はあるんだけども。

相馬

彼は『アウラ・ヒステリカ』⁵³という精神医学の図像分析も行っていますね。

谷川

デビュー作ですね。僕も一度行ったことがあります、パリの郊外にまだあるサルペトリエール病院には、女性のヒステリー患者が千数百人いました。そのシャルコーっていう有名な院長がヒステリー患者の部屋に入ると、今までおとなしく寝てた女性たちが突然身を反らせて、ヒステリーの症状を演じたのです。

その写真がたくさん残っていて、ディディ＝ユベルマン氏が分析している。ヒステリーは医者と患者が共同で発明した病気であって、医者はある種の監督であり、監督が入ってくると役者としての患者は演じるわけです。そんな彼が美術史の問題についても色々発言している。様式分析や図像学的分析ばかりでいい加減にしろっていう挑発的な言説ですよ。

相馬

ディディ＝ユベルマン氏の本はかなり翻訳されていますね。

谷川

パノフスキーの陰に隠れてほとんど取り沙汰されていなかったんだけど、アビ・ヴァールブルク⁵⁴も翻訳が始まっていますね。ヴァールブルクは何を言っているかという「残存」。例えば色んな絵を見ていくと、同じ格好をしている人間が必ず出てくる。

たとえばヒステリーで身を反らしてるとか。今までの美術史は、画家がよく学んで真似して描いているんだろう、古い作品を模倣しているんだろう、と考えるわけで

す。ヴァールブルクは人間の格好とか表情というのは、どこでもだいたい同じような「症状」を示すと考える。だから同じ格好をしているというのは、それは別に過去の作品を真似しているのではなく、「残存」であるとする。

相馬

たとえば《ラオコーン像》だとか。

谷川

ラオコーンの表情や身体の内ねり方ですね。これらがあらゆるところに見出せるわけです。いわゆる「情念定型」で、人間の情念がどういう形で現れるかはある決まった型があるとする考えです。一種の人類学的な発想ですよ。精神分析的でもある。ディディ＝ユベルマン氏も同じ立場。もちろん図像学も必要で、どちらが正しいというわけでもないんだけど、このような視点もあるというのが面白いところ。

相馬

谷川先生の専門であるバロックも、繰り返し表れる身振りみたいなところがありますよね⁵⁵。

谷川

バロックって様式じゃないんです。マニエリスムはある種の様式ですが、基本的にバロックは枠を外れるということがあって、枠を外れるってことは逸脱していくってこと。なので地域と時代を問わずにバロック的なものが必ずある。

たとえば、日本の歌舞伎なんかはバロックですよ。様式じゃなくて、ある種の世界観としてバロックは適用できるというのが僕の考え方。今ちょっと世界はバロック化しつつあるっていうふうに僕は見てます。

だけど、版画っていうのは「線的」であるからマニエリスムのなんですよ。バロックは、ヴェルフリン⁵⁶的に言えば、「線的」に対して「絵画的」です。

相馬

ルネサンスだと、フィレンツェ派とヴェネチア派ですね。

谷川

フィレンツェ派がマニエリスムで、ヴェネチア派がバロックになりますね。だから、ヴェネチア派的なティツィアーノとかね、そういう連中がバロックを支えたんだけど。

相馬

枠組みを超えてしまうバロック的なものということであれば、先ほどの西村氏の龍はエネルギーが過剰に表れている。

谷川

まさにバロック的ですよ、朽ちていく星野さんの作品も【図2】。

相馬

基本的には版画はマニエリスム的だとしても、バロック的でもあるのかもしれませんが。そろそろ時間も来ましたので質問に移りたいと思います。

質問者 1

知らないことばかりで、すごく面白かったです。今まで抽象絵画は幻想的だなと感じていて、スーパーリアリズムって言われるような写真みたいな絵画は違うなと感じているんですけども、両極にある絵画を先生方はどの

ように考えていらっしゃるのでしょうか。

谷川

スーパーリアリズムとか抽象絵画は、「幻想」という言葉からは程遠いですね。どこかにリアリティがないと駄目なんでね。僕は抽象絵画の展覧会の企画もしてますけど、抽象絵画は抽象絵画の世界で「幻想的」って言葉を使うことはないんじゃないかな。スーパーリアリズムも。

相馬

そうですね。先ほどの門坂作品はスーパーリアリズムと云えばリアリズムだけれども、ただやっぱり、最近のいわゆる超絶技巧とかとは違いますよね。

谷川

最近は美少女をやたらとリアルに描く絵描きたちが多い。美しいものを描けば作品が美しいわけじゃないですよ。デューラー⁵⁷が乞食の婆さんを描いたからって駄目だ、汚いってことにはならない。今はリアルな絵が流行ってますね。

相馬

やはり美術市場ということで考えると、ああいう作品が主流になってるらしいですね。

谷川

売れるんですかね。

相馬

売れるみたいです。顔が描かれてないと売れなくて、顔が描かれてると売れるとか。



相馬氏・谷川氏

谷川

顔で思い出した。ウニカ・チュルン⁵⁸の話も忘れてたね。

相馬

ああ、そうでしたね。

谷川

ベルメールが最後に結婚した女ですけど。17年ほど一緒にいたのかな。彼女を被写体にたくさん写真を撮っていて、彼女の太ももだとか乳房だとか、細い紐でぐるぐる巻きに、日本的に言えば緊縛してるんですよ。だから肉体のもともと関節じゃないところが関節化して、まさに球体関節化した写真を山のよう撮ってるんです、ベルメールが。ウニカ・チュルンもなかなか素晴らしい作家でね。絵なんか面白いんですけどね。

質問者2

病院に勤務してまして、以前よりアウトサイダー・アートがすごく好きで興味を持って見ていました。精密だったり、反復したりするところが印象的で気になっていました。アウトサイダー・アートは見えないものが目に入

ってくるって言われるんですけど、先生方はどう印象を持っていたのでしょうか。

谷川

アール・ブリュットっていうのを最初に言ったのはジャン・デュビュッフエ⁵⁹でしたっけ。その人が「狂人の芸術など無い」と言っているんですよね。精神がおかしいから絵が描けるわけじゃなくて、優れたものもあれば、優れてないものもある。一括りにできないと僕は思っています。いいものもあれば、駄目なものもある。

相馬

木村敏と同じく日本を代表する精神学者であった中井久夫⁶⁰が絵画療法をやっていて、患者たちの絵と芸術家の絵は分けなければいけないと。基本的に患者が描いた絵というのは症状を和らげるためのもので、つまり自分というものを壊さないために補助するようなものだ、ということです。芸術家の場合は逆に、自分というものを壊す寸前まで突き詰めなければ当然面白くないわけです。

谷川

我々だって正常かどうか分からないじゃない。正常か異常かは基準にならない。ちゃんとした作品かどうかってことじゃないかな。

質問者3

対談の冒頭で、時代が変わってきて「幻想」というものが以前よりもより消費されてしまっている感じがするとおっしゃられていましたが、相馬先生が『アナムネシスの光芒へ』⁶¹を書かれたときから改めて考え直したことがあればお話しいただけますでしょうか。

相馬

考えていたことは同じで、澁澤と瀧口をふまえた上で新たな方向性を模索したいという思いです。ただ、現在の若い作家たちも「幻想」を紡いでいるわけだから、確定的に全体像をとらえるのは無理だろうと思っていました。以前もいくつかの興味深い傾向を提示しようという方針は変わっていなかったんですけども、伝えきれなかったことを今回は補えたと思います。もう一度「幻想」を考えるというチャンスを与えていただいたので、テキストは力を入れて書かせていただきました。それともう一つは、藤村氏とのやり取りの中で、展示の方との兼ね合いなどの面で、彼にかなり影響を受けました。

質問者3

藤村氏とはどのようなやり取りがあったのですか？

相馬氏

もともと藤村氏が太宰をすでに作っていて、僕の方に企画の協力者という依頼があったんですけども、僕が門坂の文章を書くと、それに反応して藤村氏がコンセプトを修正していくという形に自然となっていました。ま



会場風景

た僕がほかの作家の方の文章を書くと、藤村氏がそのコンセプトも修正していくといった感じに共同で展覧会を構成してくようなところがあり、とてもいい体験になったと思います。

藤村

では時間となりましたので、対談を終わりたいと思います。谷川先生、相馬先生、ありがとうございました。お二人に拍手をお願いいたします(拍手)。ご来場の皆様も、ご清聴ありがとうございました。

編 集：藤村拓也

編集補助：柴田美緒、三村萌嘉(ともに当館臨時学芸員)

会場撮影：三村萌嘉

【編集補記】

本対談は、2024年6月1日(土)から同年9月1日(日)にかけて町田市立国際版画美術館で開催した企画展「幻想のフラヌール—版画家たちの夢・現・幻」の関連イベントとして行われた。

登場する人名に関しては存命の人物以外は敬称を省略し、人名や書名については編集時にごく簡単な注を付けた。また本展の開催にあわせて発行した小冊子のPDFデータを公開しているので、本対談を通じて本展に興味をもたれた方は参照されたい。相馬氏の作家小論と担当学芸員による章解説・作家解説を収録している(https://hanga-museum.jp/static/files/flaneurs_booklet.pdf)。

最後に作品図版の掲載をご快諾いただいた門坂極子氏、星野美智子氏、多賀新氏、西村沙由里氏、そして本対談の編集にご協力いただいた谷川渥氏と相馬俊樹氏に、厚く御礼申し上げます。

【注】

- 1 谷川渥『幻想の地誌学—空想旅行文学渉獵』、トレヴィル、1996年(ちくま学芸文庫、筑摩書房、2000年)。
- 2 瀧口修造(たきぐちしゅうぞう、1903-1979)詩人、美術評論家。富山出身。
- 3 澁澤龍彦(しぶさわつひこ、1928-1987)フランス文学者、小説家。東京出身。
- 4 ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin, 1892-1940)ドイツの批評家。
- 5 シャルル・ボードレール(Charles Baudelaire, 1821-1867)フランスの詩人。
- 6 門坂流(かどさかりゅう、1948-2014)イラストレーター、版画家。京都出身。
- 7 木村敏(きむらびん、1931-2021)精神病理学者。朝鮮慶尚南道生まれ。
- 8 ホルヘ・ルイス・ボルヘス(Jorge Luis Borges, 1899-1986)アルゼンチンの詩人、小説家。
- 9 エマヌエル・スウェーデンボリ(Emanuel Swedenborg, 1688-1772)スウェーデンの科学者、哲学者、神秘思想家。
- 10 巖谷國士(いわやくにお、1943生まれ)フランス文学者、評論家。東京出身。
- 11 『幻想の画廊から』、美術出版社、1967年。
- 12 マルセル・ブリヨン(Marcel Brion, 1895-1984)フランスの美術評論家、小説家。
- 13 坂崎乙郎(訳)『幻想芸術』、紀伊國屋書店、1968年(原著*Art fantastique*, 1961)。
- 14 ロジェ・カイヨワ(Roger Caillois, 1913-1978)フランスの批評家、社会学者。
- 15 三好郁朗(訳)『幻想のさなかに—幻想絵画試論』、法政大学出版局、1975年(原著*Au cœur du fantastique*, 1965)。
- 16 グレゴリオ・コマニーニ(Gregorio Comanini, 1550頃-1608)イタリアの詩人、芸術理論家。
- 17 ジュゼッペ・アルチンボルド(Giuseppe Arcimboldo, 1526頃-1593)イタリアの画家。
- 18 ユベール・ロベール(Hubert Robert, 1733-1808)フランスの風景画家。
- 19 ピエール・ナヴィル(Pierre Naville, 1904-1993)フランスの著述家、政治活動家、社会学者。
- 20 アンドレ・ブルトン(André Breton, 1896-1966)フランスの詩人、著述家。
- 21 瀧口修造、巖谷國士(監修)『シュルレアリスムと絵画』、人文書院、1997年。
- 22 パブロ・ピカソ(Pablo Picasso, 1881-1973)スペインの画家。
- 23 サルバドル・ダリ(Salvador Dalí, 1904-1989)スペインの画家。
- 24 ルネ・マグリット(René Magritte, 1898-1967)ベルギーの画家。
- 25 ジョルジュ・バタイユ(Georges Bataille, 1897-1962)フランスの思想家、小説家。

- 26 森本和夫(訳)『エロスの涙』、現代思潮社、1964年(ちくま学芸文庫、筑摩書房、2001年、原著*Les Larmes d'Éros*, 1961)。
- 27 多賀新(たがしん、1946生まれ)銅版画家。北海道出身。
- 28 星野美智子(ほしのみちこ、1934生まれ)版画家。東京出身。
- 29 西村沙由里(にしむらさゆり、1988生まれ)銅版画家。北海道出身。
- 30 ホルスト・ヤンセン(Horst Janssen, 1929-1995)ドイツの版画家。
- 31 日和崎尊夫(ひわさきたかお、1941-1992)版画家。高知出身。
- 32 谷川渥『芸術表層論—批評という物語』、論創社、2017年、352～358頁所収(初出:版画掌誌『ときの忘れもの』5号、2005年11月)。なお同書には「瀧口修造あるいは版の精神」、「星野美智子の世界」も収録されている。
- 33 三島由紀夫(みしまゆきお、1925-1970)小説家、劇作家、政治活動家。東京出身。
- 34 柄澤齊(からさわひとし、1950生まれ)版画家。栃木出身。
- 35 清原啓子(きよはらけいこ、1955-1987)銅版画家。東京出身。
- 36 リチャード・ダッド(Richard Dadd, 1817-1886)イギリスの画家。
- 37 アンティエ・グメルス(Antje Gummels, 1962生まれ)ドイツ出身の美術家。新潟在住。
- 38 『太陽』(特集:瀧口修造のマイクロコスモス)、No.382(31巻4号)、1993年3月、65頁所収。
- 39 マルセル・デュシャン(Marcel Duchamp, 1887-1968)フランスの美術家。
- 40 ジョアン・ミロ(Joan Miró, 1893-1983)スペインの画家。
- 41 ハンス・ベルメール(Hans Bellmer, 1902-1975)ドイツ出身の美術家。
- 42 四谷シモン(よつやしもん、1944生まれ)人形作家。東京出身。
- 43 ピーター・ウェブ、ロバート・ショート(著)『死、欲望、人形—評伝ハンス・ベルメール』、国書刊行会、2021年。
- 44 ジャック・ラカン(Jacques Lacan, 1901-1981)フランスの精神分析家。
- 45 種村季弘、瀧口修造(訳)『イマージュの解剖学』、河出書房新社、1975年(原著*La petite anatomie de l'image*, 1957)。種村季弘(たねむらすえひろ、1933-2004)ドイツ文学者、評論家。東京出身。
- 46 1936年の第14回国際精神分析学会での発表「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」、宮本忠雄(訳)『エクリ I』、弘文堂、1972年、123～138頁所収。
- 47 『鏡と皮膚—芸術のミュトロギア』、ポーラ文化研究所、1994年(ちくま文庫、筑摩書房、2001年)。
- 48 『孤独な窃視者の夢想—日本近代文学のぞきからくり』、月曜社、2021年。
- 49 エルヴィン・パノフスキー(Erwin Panofsky, 1892-1968)、ドイツ出身の美術史家。
- 50 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン(Georges Didi-Huberman, 1953生まれ)フランスの哲学者、美術史家。
- 51 フラ・アンジェリコ(Fra Angelico, 1387/1400-1455)イタリアの画家、ドミニコ会修道士。
- 52 寺田光徳、平岡洋子(訳)『フラ・アンジェリコ—神秘神学と絵画表現』、平凡社、2001年。
- 53 谷川多佳子、和田ゆりえ(訳)『アウラ・ヒステリカーバリー精神病院の写真図像集』、リプロボート、1990年(改題『ヒステリーの発明—シャルコーとサルベトリエール写真図像集』上下巻、みすず書房、2014年)。
- 54 アビ・ヴァールブルク(Aby Warburg, 1866-1929)ドイツの美術史家、文化史家。
- 55 『美のバロキスム—芸術学講義』、武蔵野美術大学出版局、2006年。
- 56 ハインリヒ・ヴェルフリン(Heinrich Wölfflin, 1864-1945)スイスの美術史家。
- 57 アルブレヒト・デューラー(Albrecht Dürer, 1471-1528)ドイツの画家、版画家。
- 58 ウニカ・チュルン(Unica Zürn, 1916-1970)ドイツの画家、著述家。
- 59 ジャン・デュビュッフエ(Jean Dubuffet, 1901-1985)フランスの画家。
- 60 中井久夫(なかいひさお、1934-2022)精神病理学者。奈良出身。
- 61 『アナムネシスの光芒へ—幻景綺論』、芸術新聞社、2016年。

2023年度 新収蔵作品

以下のリストは2023年度に当館が収蔵した作品の一覧である。
新収蔵という性質上、作品によっては調査続行中のものがある。
そのため各作品とも将来、作品名・制作年、技法等のデータに変更が生じる可能性がある。
リストの順番は原則として作者の生年順とし、同一の寄贈者からの受贈作品はまとめて記載した。

記載順：
番号／作者名(和・英)／生没年／連作名／作品名／制作年／技法／サイズ(mm)／寄贈者(敬称略)／図版掲載の有無

- ・ [] の作品名は仮題。
- ・ サイズは縦×横の順。
- ・ 原則として銅版画は原版(プレートマーク)のサイズ、その他の技法は図柄のサイズを示している。
ただし、紙面が断ち落とされている作品に関してはこの限りではない。
- ・ 支持体は全て紙。

寄贈作品

番号	作者名(和)	作者名(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
1	ジョアン・ミロ	Joan MIRÓ	1893-1983		手づくり諺	1970年	リトグラフ	550×770	宮嶋美子	
2	アントニ・タビエス	Antoni TÀPIES	1923-2012		手稿	1976年	エッチング、アクアチント (合成樹脂版)、リトグラフ	630×900	宮嶋美子	
3	中島史子	NAKAJIMA Fumiko			怒濤	1992年	アクアチント、エッチング	505×297	宮嶋美子	○
4	中島史子	NAKAJIMA Fumiko			私の中の宇宙	1992年	ソフトグランド・エッチング、 アクアチント	707×444	宮嶋美子	
5	ブルース・オノブラクペヤ	Bruce ONOBRAKPEYA	1932年生まれ		Ifiero II (b/w)	1982年	ディープ・エッチング	675×510	宮嶋美子	
6	谷中安規	TANINAKA Yasunori	1897-1946	街 の 本	シネマ	1933年	木版、手彩色	180×232	小野近士	
7	谷中安規	TANINAKA Yasunori	1897-1946		ムーラン・ルージュ	1933年	木版、手彩色	180×230	小野近士	○
8	谷中安規	TANINAKA Yasunori	1897-1946		渋谷	1933年	木版、手彩色	178×230	小野近士	
9	谷中安規	TANINAKA Yasunori	1897-1946		動坂	1933年	木版、手彩色	190×242	小野近士	○
10	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		雪国の市場	1931年	木版	292×427	勝平良治	
11	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		ほんでき棒売ノ図(正月奇習)	1932年	木版	280×390	勝平良治	
12	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		雪むろ	1932年	木版	293×396	勝平良治	
13	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		収穫	1933年	木版	376×522	勝平良治	
14	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		草市	1935年	木版	455×592	勝平良治	
15	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		七夕(湯沢市所見)	1937年	木版	367×514	勝平良治	
16	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971	花 四 題	冬(なんてん)	1939年	木版	672×369	勝平良治	○
17	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		夏(ハス)	1938年	木版	672×369	勝平良治	
18	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971	秋 田 風 俗 十 題	いろり	1939年	木版	290×404	勝平良治	
19	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		かまど	1939年	木版	290×404	勝平良治	
20	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		はり(屋根うら)	1941年	木版	290×404	勝平良治	
21	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		みづき(正月餅)	1943年	木版	290×404	勝平良治	
22	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		[かまど]	1939年頃	木版	290×404	勝平良治	
23	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		ナマハゲ (男鹿北浦地方 正月の奇習)	1940年	木版	392×590(2枚組・ 内1枚に2点刷り)	勝平良治	
24	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		送り盆(横手市行事)	1940年	木版	590×862(2枚組)	勝平良治	
25	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		黄金堂和讃(山形県羽黒山)	1942年	木版	752×452	勝平良治	
26	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		大漁盆踊(船川港町所見)	1947年	木版	394×800	勝平良治	
27	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		豊年盆踊(西馬音内町行事)	1948年	木版	400×1270(2枚組)	勝平良治	
28	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971	四 米 作 題	耕土(春)	1952年	木版	400×1318(2枚組)	勝平良治	
29	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		番楽(阿仁町郷土芸能)	1956年	木版	480×620	勝平良治	
30	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		飾山囃子(角館町郷土芸能)	1957年	木版	467×616	勝平良治	

番号	作者名(和)	作者名(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
31	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971	祭 四 題	たいまつ祭(大曲市春祭)	1955年	木版	397×1339(2枚組)	勝平良治	
32	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		かまくら(横手市冬の行事)	1955年	木版	395×1400(2枚組)	勝平良治	
33	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		七夕祭(能代市夏の行事)	1956年	木版	392×1350(2枚組)	勝平良治	
34	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		彼岸花(造花売り)	1935年	木版	399×288	勝平良治	
35	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971	秋 田 風 俗 十 題	梵天(玩具売り)	1935年	木版	399×288	勝平良治	○
36	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		草市	1935年	木版	399×288	勝平良治	
37	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		笹飴	1936年	木版	399×288	勝平良治	
38	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		犬コ市	1936年	木版	399×288	勝平良治	
39	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		あねこ(首人形売り)	1936年	木版	399×288	勝平良治	
40	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		雛売り(土人形売り)	1937年	木版	399×288	勝平良治	
41	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		鹿島流し	1938年	木版	399×288	勝平良治	
42	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		竿灯(七夕祭り)	1938年	木版	399×288	勝平良治	
43	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		天神様	1938年	木版	399×288	勝平良治	
44	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		一月 ねこ柳	1960年	木版	212×149	勝平良治	
45	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971	花 売 風 俗 十 二 題	二月 つばき(造花)	1961年	木版	212×149	勝平良治	
46	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		三月 もも(餅花)	1959年	木版	212×149	勝平良治	
47	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		四月 さくら(室咲)	1960年	木版	212×149	勝平良治	
48	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		五月 ほたん	1961年	木版	212×149	勝平良治	
49	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		六月 あやめ	1959年	木版	212×149	勝平良治	
50	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		七月 ゆり	1961年	木版	212×149	勝平良治	
51	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		八月 はす	1960年	木版	212×149	勝平良治	
52	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		九月 しおん	1961年	木版	212×149	勝平良治	
53	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		十月 すすき	1960年	木版	212×149	勝平良治	
54	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		十一月 きく	1959年	木版	212×149	勝平良治	
55	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		十二月 かんばな(押花)	1959年	木版	212×149	勝平良治	
56	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971	俗 秋 田 風 俗 十 題	笹餅	1936年	木版	399×288	勝平良治	
57	勝平得之	KATSUHIRA Tokushi	1904-1971		あねこ(首人形売り)	1936年	木版	399×288	勝平良治	
58	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		ステンシュトラーセ (ステン道)の建設	1941年	木口木版	279×359	サムエル・ツピンデン	
59	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		ギュルベッタールにて2	1941年	木口木版	248×357	サムエル・ツピンデン	
60	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		エメンタールの冬	1958年	木口木版	198×140	サムエル・ツピンデン	
61	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		ゴール(エメンタール) I	1959年	板目木版	414×157	サムエル・ツピンデン	
62	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		冬のジュラハウス II	1962年	板目木版、木口木版	253×491	サムエル・ツピンデン	
63	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		シャルナーグート	1965年	木口木版	245×502	サムエル・ツピンデン	○
64	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		ナップ=ブラップバッハ	1969年	木口木版	199×315	サムエル・ツピンデン	
65	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		6月、シュヴィンゲン(スイス相撲)	1971年	木口木版	163×209	サムエル・ツピンデン	
66	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		イカロスII	1975年	木口木版	378×230	サムエル・ツピンデン	
67	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		日記 1980	1980年	木口木版	200×200	サムエル・ツピンデン	
68	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991	ゴ ット ヘ ル フ 挿 絵 集	小川にて／様々な植物の組み合わせ (『ケーテお祖母さん』、『ミ シュルの花嫁探し』、『借金をし た農民の体験』、『母のマレリ』の ための挿絵)	1946- 51年頃 (1974年 の刷り)	木口木版	276×269	サムエル・ツピンデン	
69	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		刈り取る人(『召使ウリ』、『借金を した農民の体験』のための挿絵)	1941/ 49年頃 (1978年 の刷り)	木口木版	244×340	サムエル・ツピンデン	
70	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		畑仕事(『借金をした農民の体験』 のための挿絵)	1949年頃 (1978年 の刷り)	木口木版	244×340	サムエル・ツピンデン	
71	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		道具(『借家人ウリ』のための挿絵)	1943年頃 (1977年 の刷り)	木口木版	352×280	サムエル・ツピンデン	
72	エミール・ツピンデン	Emil ZBINDEN	1908-1991		リエンヌのダム	1959年	木口木版	524×265	エリッヒ・シュトゥー ルトレーガー	○

番号	作者名(和)	作者名(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
73	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		ポポロ氏の肖像	1978年	銅版画	190×160	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	○
74	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		『on y va』(全8点)	1988年	リトグラフ	820×610	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
75	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		軽すぎる	1991年	銅版画	255×185	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
76	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		ある日	1992年	銅版画	282×235	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
77	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		『cà et là』(全4点)	1993年	リトグラフ	820×610	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
78	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		午後の出会い	1994年	銅版画	232×325	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
79	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		来春まで	1995年	リトグラフ	540×340	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
80	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		[不明]	1995年	リトグラフ	540×340	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
81	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		もう手紙が届いた	1995年	リトグラフ	540×340	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
82	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		コレクトコール	1995年	スクリーンプリント	550×425	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
83	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		窓を開いて	1995年	スクリーンプリント	550×425	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
84	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		朝のニュース	1995年	スクリーンプリント	550×425	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
85	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		明日は日曜	1995年	スクリーンプリント	550×425	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
86	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		ありのまま	1995年	スクリーンプリント	550×425	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	○
87	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		寝耳に水	1995年	スクリーンプリント	737×540	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
88	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		寝耳に水	1995年	スクリーンプリント	737×540	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
89	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		仮想のとき	1995年	リトグラフ	540×340	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
90	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		夜更けの話	1995年	スクリーンプリント	737×540	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
91	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		いつかの出来事	1995年	スクリーンプリント	737×540	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
92	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		初めての日	1995年	スクリーンプリント	737×540	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
93	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		考えられないこと	1995年	スクリーンプリント	737×540	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
94	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		[不明]	1997年	銅版画	200×246	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	
95	野見山暁治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		ひとりだけの景色	1997年	銅版画	350×227	一般財団法人 野見山暁治財団 山口千里	

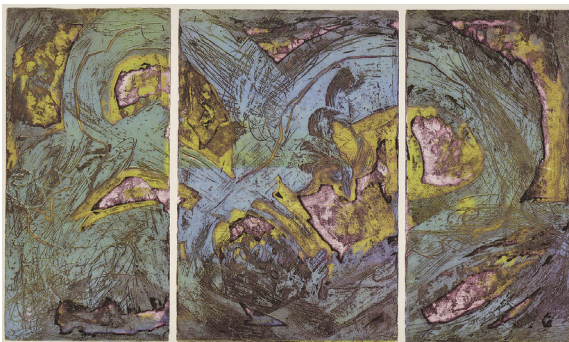
番号	作者名(和)	作者名(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
96	野見山曉治	NOMIYAMA Gyoji	1920-2023		ビントロ	2003年	銅版画	265×298	一般財団法人 野見山曉治財団 山口千里	
97	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		初期作品10点	1940年代 前半-50年 代前半	木版		詹永年	
98	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		石炭かつぎ	1956年	木版	380×530	詹永年	○
99	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		死(Ⅱ)	1959年	木版	385×530	詹永年	
100	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		求む	1960年	木版	376×522	詹永年	
101	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		凝視	1962年	木版	360×760	詹永年	
102	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		漁船と子供Ⅱ	1963年	木版	345×545	詹永年	
103	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		漁船和小孩	1963年	木版	345×545	詹永年	
104	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		戦争(Ⅲ)	1969年	木版	585×355	詹永年	
105	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		男	1970年	木版	300×760	詹永年	○
106	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		孤独	1972年	木版	360×500	詹永年	
107	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		PCB油症患者(Ⅰ)	1973年	木版	375×595	詹永年	
108	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		海辺の少女	1974年	木版	615×380	詹永年	
109	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		ヒ素ミルクの中毒患者	1978年	木版	600×400	詹永年	
110	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		蚕家婆一(郷村農婦)Ⅱ	1980年	木版	600×400	詹永年	
111	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		海女	1981年	木版	580×400	詹永年	
112	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		環境汚染 (公害で手首足首のないサル)	1991年	木版	600×400	詹永年	
113	招瑞娟	ZHAO Ruijuan	1924-2020		恕(漁夫)	1950年代	木版	600×400	詹永年	
114	詹永年	ZHAN Yongnian	1926年生まれ		漁船	1942年	木版	530×380	詹永年	
115	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ	卵 体 の 空 の 下 に	氾(あふれる)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ、手彩色	410×450(紙)	平野杏子	
116	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		旦(あした)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ、手彩色	570×415(紙)	平野杏子	
117	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		仰(あおぐ)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	410×535(紙)	平野杏子	
118	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		牙(さえる)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	420×570(紙)	平野杏子	
119	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		寿(ことぶき)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	560×420(紙)	平野杏子	
120	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		吟(うたう)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	540×410(紙)	平野杏子	
121	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		図(はかる)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	570×410(紙)	平野杏子	
122	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		風(いかのぼり)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	400×560(紙)	平野杏子	
123	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		史(ふみひと)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	410×570(紙)	平野杏子	
124	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		朶(えだ)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	565×420(紙)	平野杏子	
125	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		幻(まぼろし)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	570×420(紙)	平野杏子	
126	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		因(ちなむ)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	570×420(紙)	平野杏子	
127	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		兆(きざす)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	570×420(紙)	平野杏子	
128	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		克(まさる)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	420×570(紙)	平野杏子	
129	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		伎(わざ)	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ	570×420(紙)	平野杏子	
130	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		#16 旧作	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ、手彩色	500×360(紙)	平野杏子	
131	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		#17 旧作	1962年	スクリーンプリント(多色)、 リトグラフ、手彩色	360×500(紙)	平野杏子	
132	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文へのオマージュ (A)	1991年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
133	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文へのオマージュ (B)	1991年	スクリーンプリント(多色)	650×500	平野杏子	

番号	作者名(和)	作者名(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
134	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文へのオマージュ (C)	1991年	スクリーンプリント(多色)	650×500	平野杏子	
135	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文賛歌(A)	1994年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
136	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文賛歌(B)	1994年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
137	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文賛歌(C)	1994年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
138	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文賛歌(D)	1994年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
139	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		縄文賛歌(E)	1994年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
140	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		無題	1994年	スクリーンプリント(多色)	700×500	平野杏子	
141	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		叫ぶ(A)	1995年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
142	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		叫ぶ(B)	1995年	スクリーンプリント(多色)	650×500	平野杏子	
143	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		叫ぶ(C)	1995年	スクリーンプリント(多色)	650×500	平野杏子	
144	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		叫ぶ(D)	1995年	スクリーンプリント(多色)	500×650	平野杏子	
145	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		弟橘媛(赤)	2001年	スクリーンプリント(多色)	480×370	平野杏子	○
146	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		弟橘媛(グリーン)	2001年	スクリーンプリント(多色)	480×370	平野杏子	
147	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		弟橘媛(オレンジ)	2001年	スクリーンプリント(多色)	480×370	平野杏子	
148	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ	碧 海 の 底 深 く	縋密(しんみつ)	2002年	スクリーンプリント(多色)	510×390	平野杏子	
149	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		淡粧(たんしょう)	2002年	スクリーンプリント(多色)	510×390	平野杏子	
150	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		冠座(かんむりざ)	2002年	スクリーンプリント(多色)	510×390	平野杏子	
151	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		詞海(しかい)	2002年	スクリーンプリント(多色)	510×390	平野杏子	
152	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		天機(きかい)	2002年	スクリーンプリント(多色)	510×390	平野杏子	
153	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		宙宇(ちゅうう)	2002年	スクリーンプリント(多色)	510×390	平野杏子	
154	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		走水の海へ(弟橘媛)(ブルー)	2004年	スクリーンプリント(多色)	475×360	平野杏子	
155	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		走水の海へ(弟橘媛)(グリーン)	2004年	スクリーンプリント(多色)	475×360	平野杏子	
156	平野杏子	HIRANO Kyoko	1930年生まれ		走水の海へ(弟橘媛)(ブラック)	2004年	スクリーンプリント(多色)	475×360	平野杏子	
157	ヤン・フォス	Jan VOSS	1936年生まれ		バルタージュ 1	1990年	木版	1200×1600	人見ジュン子	○
158	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012	彼 女 は 老 い て い く	I	1967-68年	エッチング、アクアチント、 ドライポイント	505×360	シュマイサー敬子	
159	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		I	1967-68年	エッチング、アクアチント、 ドライポイント	505×360	シュマイサー敬子	
160	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		II	1967-68年	エッチング、アクアチント、 ドライポイント	505×360	シュマイサー敬子	
161	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		III	1967-68年	エッチング、アクアチント、 ドライポイント	505×360	シュマイサー敬子	
162	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		V	1967-68年	エッチング、アクアチント、 ドライポイント	505×360	シュマイサー敬子	
163	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		古事記のためのスケッチ	1970年	エッチング、アクアチント	360×475	シュマイサー敬子	
164	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記と風景	1972年	エッチング、アクアチント	220×495	シュマイサー敬子	
165	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		『中国(キャセイ)』のための スケッチ	1975年	ソフトグランド・エッチング、 エッチング、アクアチント	495×640	シュマイサー敬子	
166	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012	中 国	鳳凰	1976年	ソフトグランド・エッチング、 アクアチント	323×298	シュマイサー敬子	
167	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		幽遠	1976年	ソフトグランド・エッチング、 アクアチント	392×292	シュマイサー敬子	
168	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		月	1976年	ソフトグランド・エッチング、 エッチング、アクアチント、 ドライポイント	394×285	シュマイサー敬子	
169	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		蝶	1976年	ソフトグランド・エッチング、 アクアチント、エッチング	396×297	シュマイサー敬子	
170	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		女官	1976年	ソフトグランド・エッチング、 アクアチント、エッチング	396×298	シュマイサー敬子	
171	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		老兵	1976年	エッチング、アクアチント、 ドライポイント	370×298	シュマイサー敬子	
172	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		追想	1976年	エッチング、アクアチント	394×298	シュマイサー敬子	
173	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		手紙を送る	1976年	エッチング、レリーフ・エ ッチング、アクアチント	344×296	シュマイサー敬子	
174	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		『変化 I』(7点)	1977-78年	フォトエッチング、ソフト グランド・エッチング、ド ライポイント、エッチング、 アクアチント	各490×370	シュマイサー敬子	

番号	作者名(和)	作者名(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
175	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記とかささぎ	1978年	エッチング、アクアチント、ドライポイント	495×640	シュマイサー敬子	
176	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記と貝	1978年	エッチング、アクアチント、ソフトグランド・エッチング	495×615	シュマイサー敬子	
177	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記とホガース『放蕩者一代記』	1979年	エッチング、アクアチント	495×615	シュマイサー敬子	
178	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012	清水 京都 寺	清水寺、冬	1979年	エッチング、レリーフ・エッチング、アクアチント	415×600	シュマイサー敬子	○
179	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		清水寺、春	1979-80年	エッチング、アクアチント、ディープ・エッチング	415×600	シュマイサー敬子	
180	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		故宮への入口、北京	1981年	ソフトグランド・エッチング、アクアチント、エッチング	820×790	シュマイサー敬子	○
181	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記とハンブルク	1983年	エッチング、アクアチント、ディープ・エッチング	490×635	シュマイサー敬子	
182	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記と百の蕾	1984年	エッチング、アクアチント	480×605	シュマイサー敬子	
183	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		ラダックとザンスカールのスケッチ	1985年	エッチング、アクアチント	400×500	シュマイサー敬子	
184	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		自画像	1987年	フォトエッチング、エッチング	250×250	シュマイサー敬子	
185	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記とジミーズ島	1988年	エッチング、ドライポイント、ソフトグランド・エッチング、アクアチント	490×615	シュマイサー敬子	
186	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		ベニス	1995年	エングレーヴィング	755×980(紙)	シュマイサー敬子	
187	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		ベニス	1995年	エングレーヴィング	755×980(紙)	シュマイサー敬子	
188	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記と箱	1997年	エッチング、ドライポイント、アクアチント、ソフトグランド・エッチング	500×620	シュマイサー敬子	
189	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記と銀杏の葉	1997年	エッチング、ドライポイント、ソフトグランド・エッチング、アクアチント、ドライポイント	475×600	シュマイサー敬子	
190	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		デーヴィス基地附近 1	2000年	エッチング	495×615	シュマイサー敬子	
191	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		モーション基地	2001-03年	エッチング、アクアチント	615×1958(4枚組)	シュマイサー敬子	
192	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記とローズデール海岸のかげら	2001-10年	エッチング、アクアチント	475×595	シュマイサー敬子	
193	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		氷山の道	2002年	エッチング、アクアチント	614×983(2枚組)	シュマイサー敬子	
194	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		日記とアンコール	2007年	エッチング、アクアチント	450×590	シュマイサー敬子	
195	ジョナサン・ボロフスキー	Jonathan BOROFKY	1942年生まれ		ベルリンの夢 切手	1986年	ゼラチンシルバープリント	328×240	森一実	
196	フランチェスコ・クレメンテ	Francesco CLEMENTE	1952年生まれ		空	1985年	スピットバイト、アクアチント、ソフト・グランド・エッチング、エッチング	864×1499	森一実	
197	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		冬の岩塊(赤岳稜線)	1997年	水彩	206×353	荒秀雄	○
198	集治千晶	SHUJI Chiaki	1973年生まれ		人形遊び―水上の星	2013年	銅版(多色)	790×595	集治千晶	
199	集治千晶	SHUJI Chiaki	1973年生まれ		人形遊び―鏡の中	2013年	銅版(多色)	795×595	集治千晶	○
200	集治千晶	SHUJI Chiaki	1973年生まれ		人形遊び―カーテンの奥	2013年	銅版(多色)	795×595	集治千晶	
201	集治千晶	SHUJI Chiaki	1973年生まれ		人形遊び―遠い祝祭	2013年	銅版(多色)	795×595	集治千晶	
202	集治千晶	SHUJI Chiaki	1973年生まれ		Heartbeat―Swaying	2016年	エッチング他	795×595	集治千晶	

【第48回全国大学版画展 収蔵作品(町田市立国際版画美術館賞)】 制作年：2023年 寄贈者：版画学会

番号	作者名(和)	作者名(英)	大学名	学年	作品名	技法	サイズ(mm)
1	鈴木剛	SUZUKI Tsuyoshi	東北芸術工科大学	4年	watershed: Cedar	銅版	525×410
2	カク・ソヘイ	GUO Suping	渋谷ファッション&アート専門学校	美術表現科(1年制)	10月の公園	リトグラフ	800×1000
3	朴愛里	PARK Aeri	武蔵野美術大学	院1年	母娘	銅版	820×820
4	木村風音	KIMURA Kazane	東京造形大学	4年	主のいない部屋	リトグラフ	1150×950
5	友澤春香	TOMOZAWA Haruka	東京造形大学	2年	わたしと話したい	リトグラフ	858×1053
6	シュウ・セイイ	ZHOU JinGyi	女子美術大学	院2年	もういいかい	銅版	1270×985
7	何佳敏	HE Jiamin	愛知県立芸術大学	院1年	言葉の膜	ミクストメディア	1100×860
8	石坂瑛未	ISHISAKA Emi	京都市立芸術大学	4年	あのとき	木版	900×600



3 中島史子《怒濤》1992年



7 谷中安規《街の本 ムーラン・ルージュ》1933年



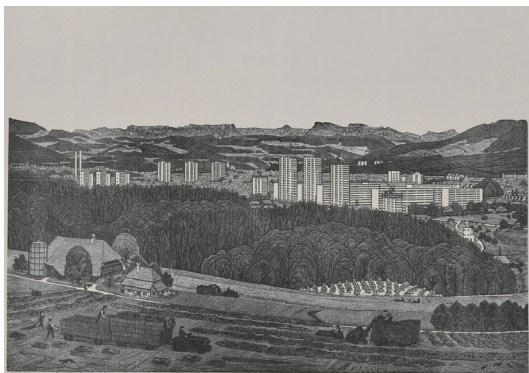
9 谷中安規《街の本 動坂》1933年



16 勝平得之
《花四題 冬(なんてん)》
1939年



35 勝平得之
《秋田風俗十態 梵天(玩具売り)》
1935年



63 エミール・ツビンデン《シャルナーゲート》1965年
© K. + S. Zbinden, Bern



72 エミール・ツビンデン
《リエヌヌのダム》1959年
© K. + S. Zbinden, Bern



73 野見山晁治《ボボロ氏の肖像》1978年



86 野見山晁治《ありのまま》1995年



98 招瑞娟《石炭かつぎ》1956年



105 招瑞娟《男》1970年



145 平野杏子《弟橘媛(赤)》2001年



157 ヤン・フォス《パルタージュ 1》1990年
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2025 G3806



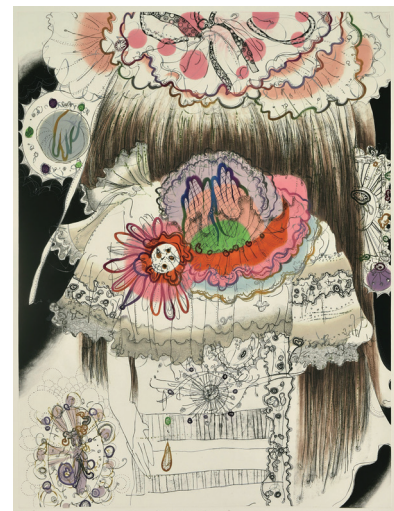
178 ヨルク・シュマイサー《京都清水寺 清水寺、冬》
1979年



180 ヨルク・シュマイサー
《故宮への入口、北京》1981年



197 門坂流《冬の岩塊(赤岳稜線)》1997年



199 集治千晶《人形遊び—鏡の中》
2013年

2023年度 展覧会の記録

【企画展示室】

「自然という書物 15～19世紀のナチュラルヒストリー＆アート」 2023年3月18日(土)～5月21日(日)		56日間 総入場者数	10,362人
15世紀から19世紀までの西洋のナチュラルヒストリー（自然誌）とアート（美術）のつながりに注目し、人間が表してきた自然のすがた・かたち（画像）を紹介した展覧会。記録された自然の普及に活字や版画などの印刷技術が大きな役割を果たしてきたこと、自然が美術の靈感源となってきたこと、美術の表現手法が自然の図解に用いられてきたことに注目し、西洋の紙上に築かれてきたさまざまな自然のすがた・かたちを、版画や書籍などをつうじて展覧した。 博物画を中心とした版画によるイラストレーション（図解）の歴史をたどることで、自然がどのように記述・描写されてきたかを概観することをねらいとした。当館の収蔵品約100点にくわえ、美術館や大学図書館14箇所から約140点を借用し、約240点による全4章の構成。第1章「想像と現実のあわい」と第2章「もっと近くで、さらに遠くへ」、そして第3章「世界を分け、腑分け、分け入る」では、編年によって出品作を展示。自然がどのように記述・描写されてきたか、どのように見られ、考えられてきたかを、歴史をおって概観できる内容とした。最終章の第4章「デザイン、ピクチャレスク、ファンタジー」では、博物誌と美術の混交ともいべき作品を紹介し、版画技法によってリアルに再現された自然だけでなく、人間の想像力が生み出した作品も併置することで、学術性と遊戯性の両方を堪能できる内容を目指した。 当館SNSでの告知、ニコニコ美術館やYouTubeでのライブ配信、日曜美術館のアートシーンでの紹介など、各種メディアによる情報発信の相乗効果のためか、入場者数は10,000人をこえた。また図録は会期半ばに完売し、増刷を望む声が多く寄せられた。自然にかんするグッズや版画、書籍のポップアップストアも好評だった。美術のみならず自然（生物、植物など）のファンも魅了する内容や関連催事であったことも、高評価や入場者数の増加につながったと考えられる。なお本展は、第19回（2024年度）西洋美術振興財団賞・学術賞を受賞した。			
主催：町田市立国際版画美術館			
印刷物：図録（B5、全200頁）、チラシ、ポスター、DM			
図録執筆者：桑木野幸司（大阪大学教授）、菅靖子（津田塾大学教授）、藤村拓也（担当学芸員）、高野詩織（当館学芸員）、川添愛奈（当館臨時学芸員）			
関連行事	参加者総数 （※スペシャルトークを除く）	1,101人	
◆記念講演会① 「イギリスと自然—書物、室内から庭へ、そして田園都市へ—」 講師：菅靖子	4月15日(土)	39人	
◆記念講演会② 「科学とアートの悩ましき葛藤 華麗なるルネサンス博物図譜の世界」 講師：桑木野幸司	5月13日(土)	90人	
◆スペシャルトーク 「BHチャンネル×版美 YouTube生配信!!」 出演：ヒロ・ヒライ（BHチャンネル主宰）、橋本麻里（エディター）、山本貴光（文筆家）、藤村拓也	4月1日(土)	3,070人 ※8/31時点の視聴者数	
◆子ども講座—みてみてつくろう— 「自然の絵本をつくる」 講師：杉浦幸子（武蔵野美術大学教授） 制作指導：上村牧子（当館普及係学芸員）	3月25日(土)	27人	
◆ポップアップストア 出店：dubhe（古版画・博物絵はがき）、古書ドリス（古本）、うみねこ博物堂（昆虫標本・博物雑貨）	5月3日(水・祝)～ 5月5日(金・祝)	670人 ※来店者数	
◆プロムナード・コンサート 「音を楽しむ 自然と楽しむ」 演奏：Duo Iris（真野謡子：バイオリン、後藤加奈：ピアノ）	4月29日(土・祝)	185人	
◆ギャラリートーク 担当学芸員・藤村拓也	4月8日(土) 5月6日(土)	90人	

「出来事との距離―描かれたニュース・戦争・日常」 2023年6月3日(土)～7月17日(月・祝)		39日間 総入場者数	3,937人
「出来事との距離」というタイトルを据えることで、ニュースや戦争を描いた作品とそれに対して画家や絵師がとったスタンスを相対化することを目指し企画した。当館収蔵品のなかから、ゴヤ、月岡芳年、浜田知明など時代や地域を超えてニュースや戦争をテーマにした作品約130点を展示するとともに、このテーマと響きあう制作を行う4人の若手作家を紹介し、合計150点を展示した。なかでも本展の全体テーマと通じる活動を行う松元悠を特集した。これにより現代アートの関心層にも訴求する展覧会構成とし、若い世代にも当館収蔵品を知ってもらうことを試みた。 5章構成とし、1章から4章まではすべて当館収蔵品を紹介した。「1章 ゴヤが描いた戦争」はゴヤの『戦争の惨禍』から20点を展示。名作を最初に展示することで、展覧会の世界に引き込むことを目指した。「2章 戦地との距離」では浜田知明、『新日本百景』、畦地梅太郎、北岡文雄の作品合計約25点を展示した。浜田はゴヤの影響を受けており、1章から2章にかけては両者の作品が並びつつ、アジア太平洋戦争に関わる作品が展開していく流れとした。「3章 浮世絵と「報道」」では時代を遡り、戊辰戦争に着想した月岡芳年の『魁題百撰相』、錦絵新聞、西南戦争錦絵、日清戦争錦絵、浅井忠作品など約合計45点を展示した。時事問題が描けなかった江戸時代から、浮世絵が報道・戦争錦絵へと主題を広げる流れを示した。「4章 ニュースに向き合うアイロニー」では、昭和・平成期に社会的なテーマで制作した石井茂雄・郭徳俊・馬場禱男の作品約40点を展覧した。最後の「5章 若手アーティストの作品から」では、土屋未沙、小野寺唯、ソ・ジオ、松元悠の4名の作品合計約20点を紹介し、なかでも松元を特集した。松元はメディアやSNSが伝えるニュースの現場を訪れて想像を働かせ、当事者の姿を自画像で描くことで、日常と地続きにある「事件と人間の不可解さ」に分け入る活動をしている注目のアーティストであり、大学時代から現在までの作品を紹介した。なお、小野寺、ソ、松元は全国大学版画展受賞者であり、当館で収蔵している受賞作を活用した。 朝日新聞、東京新聞(中日新聞)、京都新聞、芸術新潮、美術展ナビに展覧会レビューが寄せられ、ウェブ美術手帖、Tokyo Art Beatには松元氏へのインタビューが公開され、展覧会後半にかけて来館者数が伸びた。特に、法廷画家の活動も行っている松元氏のアーティスト活動に注目が集まり、その視点からの取材を受けることが多かった。			
主催：町田市立国際版画美術館			
印刷物：出品リスト、リーフレット(A5二つ折り、無料配布)、チラシ、ポスター、DM			
関連行事		参加者総数	250人
◆松元悠 アーティスト・トーク		6月17日(土)	41人
◆ブロムナード・コンサート「戦争と日常 音楽で描かれた情景」 出演：江澤隆行(ピアノ)		7月16日(日)	134人
◆ギャラリートーク 担当学芸員・町村悠香		6月18日(日) 7月1日(土)	75人

「版画家たちの世界旅行—古代エジプトから近未来都市まで」 2023年7月22日(土)～9月24日(日)		56日間 総入場者数	8,880人
「世界旅行」をテーマに、西洋版画のオールドマスターから現代作家まで、多種多様な国と地域から想を得た版画家の作品を紹介した収蔵品企画展。新型コロナウイルス感染症の影響により展示期間が半減した2021年度の特別展「#映える風景を探して—古代ローマから世紀末パリまで」のを展示の前半部で再構成し、後半部には日本、オーストラリア、エジプト、南極などを実際に旅した版画家の作品を新たに付け加えた。 約160点による全5章の構成。第1章「イタリアを目指す旅」では芸術家が自己研鑽を目的に旅行するようになった16世紀に遡り、ピーテル・ブリューゲル(父)、ペーテル・パウル・ルーベンスらの版画を展示。第2章「『オリエント』をめぐる旅」、第3章「『絵になる風景』を発見する旅」では、19世紀のヨーロッパで流行した「オリエンタリズム(東洋趣味)」と、産業化により失われる自然や歴史的建造物に美を見出す「ピクチャレスク」の感性に着目し、ウジェーヌ・ドラクロワ、ポール・ゴーガン、J・M・W・ターナーらの作品を展示。第4章「都市に集う芸術家の旅」では19世紀末から20世紀にかけて数多くの芸術家を惹きつけたパリやニューヨークを表象した作品を展示。第5章「現代の『旅する芸術家』」では、現代の「旅する芸術家」として、世界各地で大規模なアート・プロジェクトを手がけた「クリストとジャンヌ＝クロード」の芸術家夫婦と、ヨーロッパからアジア、南極までを旅した版画家ヨルク・シュマイサーを特集し、エピソードでは「旅する版画」と題し、ポリネシアや東南アジアの作家が制作し、国際展を通じて当館に所蔵された作品を紹介した。 本展では、夏休み期間の展覧会として、学校の授業やメディアを通じて様々な国や地域に興味を持った子どもたちが楽しめる構成を心がけた。会場内には小学校低学年向けのミニ解説を設置し、ジュニアガイドを無料配布した。さらに、2018年夏以来5年ぶりの開催となる親子向けバックヤードツアーや、子どものための鑑賞会などのイベントも開催した。小学生以下の入場者は1,038人で、全体の約12%に上った。			
主催：町田市立国際版画美術館			
印刷物：出品リスト、小中学生向けジュニアガイド(A5観音折り、無料配布)、チラシ、ポスター、DM			
関連行事		参加者総数	402人
◆記念講演会「旅と版画 驚異・発見・夢想」 講師：巖谷國士(仏文学者・美術批評家・旅行作家)		9月18日(月・祝)	102人
◆バックヤードツアー「親子で探検！美術館バックヤードツアー」 協力：2023年度博物館実習 実習生		8月5日(土)	37人 (17組)
◆こどものための鑑賞会「はながワールドツアー」 講師：富田めぐみ(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表理事)		8月19日(土)	19人
◆プロムナード・コンサート「音楽の世界を旅する」 出演：桜美林大学芸術文化学群、玉川大学芸術学部		9月9日(土)	196人
◆ギャラリートーク 担当学芸員・高野詩織		7月29日(土) 8月20日(日)	48人

「楊洲周延 明治を描き尽くした浮世絵師」 2023年10月7日(土)～12月10日(日)		55日間 総入場者数	8,783人
楊洲周延(ようしゅうちかのぶ・1838-1912)は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師である。周延による作品は教科書や歴史資料集等に度々掲載されるものの、彼の活動があまりに広範であったため、長らくその全貌は知られていなかった。彼の画業を総覧し、全体像を浮かび上がらせることを本展覧会の目的とした。 当館収蔵品に加え、Kazuko Collectionをはじめとする諸機関から作品を拝借し、全330点の8章構成とした。なお前期後期ではほぼ全点展示替えをおこなっている。第1章「高田藩士・橋本直義の時代―幕末～明治初年―」では周延の前半生を紹介し、第2章「浮世絵師・楊洲周延として立つ―明治8～10年頃―」では浮世絵師としての活動を本格化させた時期の作品、第3章「画風の模索―明治11～16年―」では西南戦争錦絵制作を経て多様な画題に取り組む周延の活動に焦点を当てた。第4章「美人画の絵師―明治17～19年―」では『名譽色咲分』といった大規模な美人画の揃物を展示し、第5章「二大テーマの誕生：開化と懐古―明治20～23年―」では周延の主要画題である文明開化と江戸懐古が表された作品、そして第6章「広がる活動―明治24～26年―」では周延による新聞挿絵に加えて弟子との合作を紹介した。以上が企画展示室1の内容であり、企画展示室2においては第7章「浮世絵をこえて―明治27～31年―」で周延の代表作として名高い『千代田之大奥』『時代かがみ』『真美人』を展示し、第8章「浮世絵最後のきらめき―明治30～40年代―」では周延晩年の作を紹介した。 楊洲周延の存在は一般に広く知られていなかったが、NHK日曜美術館アートシーンや日本経済新聞(土曜版)で特集されることにより、周延と本展覧会の存在が広く認知され、来館者数が飛躍的に向上した。また展覧会図録は好評を博し、会期最終日に完売した。			
主催：町田市立国際版画美術館			
助成：芸術文化振興基金			
印刷物：図録(A4変型、全288頁)、チラシ、ポスター、DM			
図録執筆者：真水康樹(新潟大学法学部教授)、鈴木浩平(美術史家)、荒川将(上越市立歴史博物館主任[学芸員])、大久保純一(当館館長)、村瀬可奈(東京国立博物館研究員・元町田市立国際版画美術館学芸員・本展覧会企画者)、宮崎黎(担当学芸員)			
関連行事	参加者総数	394人	
◆講演会①(ゆうゆう版画美術館まつり関連イベント)「楊洲周延―江戸と明治の架け橋―」 講師：村瀬可奈	10月22日(日)	63人	
◆講演会②「周延と明治の浮世絵」 講師：大久保純一	12月3日(日)	91人	
◆「赤ちゃんのための鑑賞会」 講師：富田めぐみ(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表理事)	11月15日(水)	16人	
◆プロムナード・コンサート「フルートとピアノで巡る明治の風景」 出演：河野彬(フルート)、高橋ドレミ(ピアノ)	11月4日(土)	165人	
◆担当学芸員によるギャラリートーク 担当学芸員：宮崎黎	10月28日(土) 11月25日(土)	59人	

「2023年度新収蔵作品展 Present for You」 2023年12月21日(木)～2024年2月18日(日)	45日間 総入場者数	19,513人
2022年度から2023年度上半期に新たに収蔵された445点の中から約100点を展示。主な出品作家は、谷中安規(1897-1946)、榎倉康二(1942-1995)、ヨルク・シュマイサー(1942-2012)、門坂流(1948-2014)など。		
主催：町田市立国際版画美術館		
印刷物：出品目録(庁内印刷)		

【常設展示室(収蔵品による特集展示)】 印刷物：出品目録(庁内印刷)

第1期 日本の自然と多色摺木版の世界 2023年3月15日(水)～6月11日(日)	62日間 総入場者数	11,658人
江戸時代の浮世絵の花鳥画や風景画、版本などを前後期で合計105点展示し、さまざまな自然の造形を、多色摺木版の魅力とともに紹介した。		
第2期 大正・昭和初期の東京風景 織田一磨を中心に 2023年6月14日(水)～9月24日(日)	89日間 総入場者数	11,711人
明治・大正・昭和に活動した石版画家・織田一磨(1882-1956)の作品を中心に、関東大震災前と大震災直後、そして復興後の東京を描いた版画を展示して、東京風景の変化の様子を概観した。全46点出品。		
第3期 腐蝕の刻(とき) —エッチングの世界 2023年9月27日(水)～12月17日(日)	71日間 総入場者数	7,814人
描画した版を腐蝕することによって生まれるエッチングの表現の魅力を、16世紀から18世紀にかけて制作された西洋の作例40点で紹介。また同時期に町田市民文学館で開催されていた「生誕100年 遠藤周作展 ミライを灯すことば」(2023年10月21日～12月24日)にあわせて、遠藤周作(1923-1996)が共感を寄せていたジョルジュ・ルオー(1871-1958)の銅版画3点も展示した。		
第4期 黒崎彰 50年の軌跡 2023年12月21日(木)～2024年3月10日(日)	63日間 総入場者数	21,314人
浮世絵の技術を活かした木版画作品で知られ、版画史研究者・教育者としても大きな業績を残した黒崎彰(1937-2019)の初期から晩年までの代表作30点を展示し、50年の軌跡をたどった。		

「自然という書物 15～19世紀のナチュラルヒストリー&アート」



チラシ



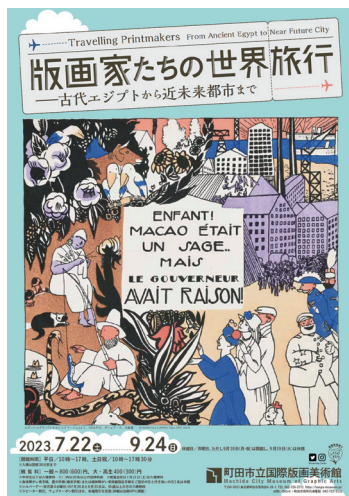
「出来事との距離—描かれたニュース・戦争・日常」



チラシ



「版画家たちの世界旅行—古代エジプトから近未来都市まで」



チラシ



「楊洲周延 明治を描き尽くした浮世絵師」



チラシ



2023年度 収蔵品貸出記録

スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた

長崎県美術館 [2023年4月8日～6月11日]
国立西洋美術館 [2023年7月4日～9月3日]

1	ラファエル・カノガール	音楽の戦士たち
2	ラファエル・カノガール	デモ
3	エドゥアルド・チリーダ	小さな黒
4	エドゥアルド・チリーダ	ペンローズ礼讃
5	アントニ・タピエス	物質上の円

版画＋ 馬場章銅版画展

葦崎大村美術館 [2023年6月3日～8月27日]

1	馬場章	Planetarium I
2	馬場章	Planetarium II
3	馬場章	Planetarium XI

ガウディとサグラダ・ファミリア展

東京国立近代美術館 [2023年6月13日～9月10日]
佐川美術館 [2023年9月30日～12月3日]
名古屋市美術館 [2023年12月19日～2024年3月10日]

1	科学芸術委員会(編)	『エジプト誌』 古代編第3巻第2葉 テーベ風景
2	科学芸術委員会(編)	『エジプト誌』 古代編第3巻第3葉 テーベ風景
3	科学芸術委員会(編)	『エジプト誌』 古代編第3巻第4葉 テーベ風景
4	科学芸術委員会(編)	『エジプト誌』 近代編第1巻第41葉 カイロ風景
5	科学芸術委員会(編)	『エジプト誌』 近代編第1巻第42葉 カイロ風景
6	科学芸術委員会(編)	『エジプト誌』 近代編第1巻第43葉 カイロ風景

土とともに 美術にみる〈農〉の世界—ミレー、ゴッホ、浅井忠から現代のアーティストまで—

茨城県近代美術館 [2023年7月8日～9月3日]

1	草間彌生	南瓜
2	草間彌生	芽
3	草間彌生	開花
4	新居広治	農婦(砂川)
5	編集：魯迅／人民文学社	『ケーテ・コルヴィッツ版画選集』(復刻版)
6	編集：菊地三郎／中日文化研究所	『中国木刻集』

うえののそこから「はじまり、はじまり」荒木珠奈 展

東京都美術館 [2023年7月22日～10月9日]

1	荒木珠奈	cocoon・赤
2	荒木珠奈	cocoon・白

長浜城主・秀吉と歴代城主の変遷 長浜城歴史博物館 2023年7月22日～9月18日		
1	月岡芳年	魁題百撰相 柴田伊賀守勝豊

春陽会誕生100年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ 東京ステーションギャラリー [2023年9月16日～11月12日] 栃木県立美術館 [2024年1月13日～3月3日] 長野県立美術館 [2024年3月16日～5月12日] 碧南市藤井達吉現代美術館 [2024年5月25日～7月7日]		
1	北岡文雄	道路工事
2	北岡文雄	雪の犀川
3	北岡文雄	窓辺の静物
4	北岡文雄	漁師の家

100年前の未来：移動するモダニズム 1920-1930 神奈川県立近代美術館 [2023年10月7日～2024年1月28日]		
1	パーヴェル・リュバルスキー	無題(『青美』1号)
2	後藤忠光	『青美』1号 表紙
3	岡田龍夫編集	『形成画報』創刊号
4	李華編集	『現代版画』第2集
5	李華編集	『現代版画』第3集
6	李華編集	『現代版画』第8集

激動の時代―幕末明治の絵師たち サントリー美術館 [2023年10月11日～12月3日]		
1	安田雷洲	『東海道五十三駅』 日本橋・品川・川崎・神奈川
2	安田雷洲	『東海道五十三駅』 保土ヶ谷・戸塚・藤沢・平塚
3	安田雷洲	『東海道五十三駅』 大磯・小田原・箱根・三島
4	安田雷洲	『東海道五十三駅』 沼津・原・吉原・蒲原
5	安田雷洲	『東海道五十三駅』 油井・興津・江尻・府中
6	安田雷洲	『東海道五十三駅』 丸子・岡部・藤枝・嶋田
7	安田雷洲	『東海道五十三駅』 金谷・日坂・掛川・袋井
8	安田雷洲	『東海道五十三駅』 見附・浜松・舞坂・荒井
9	安田雷洲	『東海道五十三駅』 白須賀・二川・吉田・御油
10	安田雷洲	『東海道五十三駅』 赤坂・藤川・岡崎・池鯉鮒
11	安田雷洲	『東海道五十三駅』 鳴海・宮・桑名・四日市
12	安田雷洲	『東海道五十三駅』 石薬師・庄野・亀山・関
13	安田雷洲	『東海道五十三駅』 阪之下・土山・水口・石部
14	安田雷洲	『東海道五十三駅』 草津・大津・京都・祇園新島原
15	歌川国芳	みかけはこはろがとんだい、人だ
16	作者不詳	じしん百万遍
17	歌川広景	青物魚軍勢大合戦之図
18	作者不詳	子供あそび百ものがたり

19	月岡芳年	『和漢百物語』 小田春永
20	月岡芳年	『和漢百物語』 清姫
21	月岡芳年	『和漢百物語』 渡辺源治綱
22	月岡芳年	『和漢百物語』 大宅太郎光圀
23	月岡芳年	『和漢百物語』 華陽夫人
24	月岡芳年	『和漢百物語』 宮本無三四
25	月岡芳年	『魁題百撰相』 鷺池平九郎
26	月岡芳年	『魁題百撰相』 井上五郎兵衛
27	月岡芳年	『魁題百撰相』 堀井恒右エ門
28	月岡芳年	『魁題百撰相』 菅谷九右エ門
29	月岡芳年	『魁題百撰相』 滋野左エ門佐幸村
30	月岡芳年	『魁題百撰相』 駒木根八兵衛
31	河鍋曉斎	名鏡倭魂 新板

みんな、版画家だった!?—戦後版画運動の成り立ちと起源		
明治大学和泉キャンパス 和泉図書館 1Fギャラリー 主催：明治大学大学院教養デザイン研究科 [2023年11月15日～11月20日]		
1	胡其藻	『一個平凡的故事 現代版画連環木刻之二』現代創作版畫、民国24(1935)年
2	劉岷	『罪與罰図』未名木刻社、1936年
3		「現代中日版画展 解説」(朝日新聞)1948年 5 月
4	編・訳：李平凡	『花岡惨案』人民美術出版、1956年 7 月
5	瀧平二郎	『皇帝的“新衣”』人民美術出版、1953年 9 月

新版画という創造		
那珂川町馬頭広重美術館 [2023年11月18日～12月17日]		
1	伊東深水	近江八景 比良
2	伊東深水	近江八景 矢橋
3	伊東深水	近江八景 粟津
4	伊東深水	新美人十二姿 口紅
5	伊東深水	新美人十二姿 島の女
6	伊東深水	新美人十二姿 炬燵
7	石井柏亭	東京十二景 柳ばし
8	石井柏亭	東京十二景 赤さか
9	橋口五葉	髪梳ける女
10	橋口五葉	長襦袢の女
11	橋口五葉	夏衣の女
12	橋口五葉	浴後之女
13	山村耕花	梨園の華 初世中村鴈治郎の茜半七
14	山村耕花	梨園の華 市川猿之助の早見藤太
15	山村耕花	梨園の華 初世中村吉右衛門の星影土右衛門
16	山村耕花	梨園の華 十三世守田勘彌のジャン・バルジャン
17	小早川清	湯上り
18	小早川清	市丸

ストーリーズ—物語る版画たち		
熊本県立美術館 [2024年1月7日～3月24日]		
1	アルブレヒト・デューラー	『小受難伝』 エッケ・ホモ
2	アルブレヒト・デューラー	『小受難伝』 磔刑
3	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 キリストの荊冠
4	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 この人を見よ
5	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 ユダヤ人たちに説教をするキリスト
6	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 十字架を担うキリスト
7	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 十字架にかけられるキリスト
8	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 十字架をたてる
9	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 キリストの磔刑
10	アルブレヒト・アルトドルファー	『人類の墮落と救済』 キリスト降架
11	アルブレヒト・デューラー	『黙示録』 ヨハネと七つの燭台
12	アルブレヒト・デューラー	『黙示録』 四人の騎者
13	ジャック・カロ	聖アントニウスの誘惑
14	ルーカス・ファン・レイデン	マグダラのマリアの踊り
15	パウルス・ボンティウス	ベスト患者のためにキリストに祈る聖ロクス
16	リュカス・フォルステルマン	聖ラウレンティウスの殉教
17	ジョルジョ・ギージ	アベレスの「誹謗」
18	ヨハン・サデラー	岐路に立つヘラクレス
19	ニコラ・ランクレ(原画)	『四季』 春
20	ニコラ・ランクレ(原画)	『四季』 夏
21	ニコラ・ランクレ(原画)	『四季』 秋
22	ニコラ・ランクレ(原画)	『四季』 冬
23	ギュスターヴ・ドレ	ダンテの『神曲 地獄篇』 第5歌 パオロとフランチェスカ
24	ギュスターヴ・ドレ	ダンテの『神曲 地獄篇』 第13歌 ハルビュイア
25	ギュスターヴ・ドレ	ダンテの『神曲 地獄篇』 第28歌 ベルトラン・デ・ボルン
26	ギュスターヴ・ドレ	ダンテの『神曲 地獄篇』 第34歌 サタン
27	ギュスターヴ・ドレ	ダンテの『神曲 天国篇』 第31歌 天上の薔薇
28	ギュスターヴ・ドレ	ダンテの『神曲 天国篇』 第31歌 玉座のベアトリーチェ
29	ロイ・リキテンスタイン	夢想
30	ロイ・リキテンスタイン	いい夢でも見ている、ベイビー！

第8回横浜トリエンナーレ展		
横浜美術館ほか [2024年3月15日～6月9日]		
1	小野忠重	『三代ノ死』表紙、1、4、7、11、12、15、17、18、22、30、35、40、46、48、49、番外1、2
2	編集・発行：李文琨	『浮萍集 木刻版画』
3	編集・発行：神戸新集体版画協会	『華僑児童木刻散集』1号
4	編集：菊地三郎 発行：中日文化研究所	『中国木刻集』
5	編集：鈴木賢二	『刻画』2号、3号
6	編集：中日友好協会	『花岡ものがたり』
7	編集：李平凡	『花岡惨案』
8	編集・発行：中華全国美術工作者協会	『日本人民藝術家木刻選集』
9	編集・発行：中国美術家協会	『中国美術家協会主催 日本木刻展覧会』目録

2023年度 普及係事業

2023年 4 月～2024年 3 月

1 版画講座

版画工房・アトリエにて開催される版画の講習会。様々な種類の版画を体験することができます。制作を通して版画の理解を深め、創作の楽しさを味わうことを目的にしています。子どもを対象にした講座では、版画美術館ならではの楽しい制作体験ができるよう工夫を重ねています。

	事業名	対象	概 要	実施日程	定員	のべ参加人数	うち小中学生	参加費
1	銅版画一日教室①	一般 ※高校生以上	銅版画の基本的な制作を一日で体験する。初心者から参加可。12×16cmの銅版を用い、ドライポイント技法で作品を制作。下絵は各受講生が持参。様々な方法で描きこむことにより深みのある作品作りを目指す。 講師：馬場知子(版画家) 会場：版画工房	6/9(金) 10:30～16:00	10人	9人	—	3,000円
2	銅版画一日教室②			6/10(土) 10:30～16:00	10人	10人	—	
3	リトグラフ一日教室①		各自用意した下絵をもとに、単色のリトグラフ作品を制作する。受講生は講師のアドバイスを受けつつ、様々な描画材を使ってアルミ版に描き込むことで、リトグラフならではの表現を体験する。初心者から参加可。 講師：小森琢己(版画家) 会場：版画工房	9/1(金) 11:00～16:00	8人	8人	—	
4	リトグラフ一日教室②			9/2(土) 11:00～16:00	8人	7人	—	
5	木版画一日教室①		彫刻刀やバレンの持ち方から、絵具の溶き方、刷毛の使い方まで、木版画の基本的な制作を一日で体験する。初心者から参加可。単色または2色摺りの年賀状を制作。下絵は講師が複数用意した中から好きなものを選ぶ。彫りから摺りまで、ハガキ30枚程度を制作する。 講師：木下泰嘉(版画家) 会場：アトリエ	12/5(火) 10:30～16:00	16人	15人	—	3,000円
6	木版画一日教室②			12/6(水) 10:30～16:00	16人	16人	—	
7	創作講座 リトグラフ 「描く×版画＝リトグラフの世界」		4版多色刷りの作品制作を通してリトグラフの基本的な制作手順と表現を学ぶ。受講生が下絵を持参し、色版の分けかたや刷る色などを講師と相談しながらそれぞれのペースで制作した。2点制作する方や5版刷り重ねた方もおり、個性豊かな作品が完成した。最終日は完成作品を囲んで鑑賞会を行った。講師からそれぞれの作品にコメントをいただいたほか、サインの入れ方や額装の仕方も指導していただいた。 講師：山口茉莉(版画家) 会場：版画工房	9/13(水)～11/15(水) 13:30～16:30 水曜日10回	10人	100人	—	3,000円
8	子ども講座① ちいさな本をつくる	小学3～6年生とその保護者	B3サイズの紙に色鉛筆やユニボスカ(顔料系マーカーペン)など様々な描画材で自由に線や形を描き、5cm角程に切りそろえる。切った紙は受講生同士で交換しても良く、すべて1冊の本にしても良い。それらをページ組みを考えながら並べ、寒冷紗とボンドで背を貼り合わせて小さなオリジナルの本をつくる。子どもと保護者それぞれが制作し、講座の最後に参加者全員の作品を鑑賞して感想を述べあった。 講師：常田泰由(版画家) 会場：アトリエ	5/6(土) 13:30～16:00	8組16人	7組14人	7人	2,000円1組
9	夏期子ども講座 妖怪たちの音楽祭①	小学3～6年生	東京学芸大学の学生ボランティア15人と指導教官が企画・指導をおこなう。「妖怪たちが音楽祭をひらいたよ」というテーマのもと、受講生は事前に妖怪の下絵を作成して持参。スクリーンプリントの技法で紙とTシャツに印刷した。版は背景(グラデーション刷り)と妖怪の主版(黒インク)の2版。講座終了後、子どもたちの作品と指導にあたった学生の版画作品を市民展示室で展示した。 講師：清野泰之(東京学芸大学芸術・スポーツ科学系教授) 会場：アトリエ	7/29(土) 10:30～15:30	15人	15人	15人	2,000円
10	夏期子ども講座 妖怪たちの音楽祭②			7/30(日) 10:30～15:30	15人	14人	14人	
11	子ども講座② —みてみてつくろう— キッチンリトグラフに挑戦 「バターとコーラでみんなのまちを刷ってみよう！」		企画展「版画の青春 小野忠重と版画運動」(2024年3/16～5/19開催)を鑑賞。クイズ形式で講師・企画展担当学芸員・講座担当学芸員のお気に入り作品を探し、その作品の簡単な解説を聞く。その後講堂にて企画展出品作品にちなんだ「まち」をテーマに、「キッチンリトグラフ」という技法で小作品を制作した。講座の最後に参加者の作品を壁に並べてそれぞれの制作意図などを聞く鑑賞の時間を持った。 講師：杉浦幸子(武蔵野美術大学芸術文化学科教授) 版画制作指導：当館学芸員 会場：講堂・企画展示室 ※キッチンリトグラフ…台所にある身近な素材で簡単にリトグラフが体験できる平版技法。アルミホイルを版に用い、チョコレートやハンドクリームで絵を描き、コーラで製版を行う。	2024年3/30(土) 13:30～16:00	16人	14人	14人	1,000円

2 学校教育への協力

町田市内の学校を中心に、美術部の体験学習や学校単位での団体鑑賞、出張授業などを実施するほか、版画技法について教員からの問い合わせに答えたり、教員研修会への講師紹介・道具の貸出しなども行っています。

	事業名	対象	概 要	実施日程	参加人数	のべ参加人数	うち小中学生	参加費
1	版画講座	東京都立小川高等学校 美術部(2年生)	学芸員の指導によりアルミ版を用いたリトグラフ(単色)の作品を制作。 リトグラフの表現の特徴などを学ぶ。 会場：版画工房	8/15(火) 10:15～16:00	3人	3人	—	1,000円
2	版画講座	東京学芸大学 教育学部 美術講座の学生	アルミ版によるリトグラフの基本的な制作方法を学ぶ。1版単色刷(色インク)にベタ版を加えた2色刷りを制作する。 会場：版画工房	2024年 2/28(水)、 3/6(水) 10:30～16:00	7人	14人	—	3,000円
3	体験学習	神奈川県立麻生支援学校 中学部	講堂にて複製浮世絵版木の摺り体験、伝統的な木版画の道具や素材の紹介(手で触れる)のほか、常設展示室での鑑賞を行った。 会場：講堂	①9/28(木) ②10/5(木) 10:50～11:20	②① 57人	②① 57人	②① 57人	—
4	教員研修会等への協力	千代田区立小学校教員	千代田区教育会図画工作部からの依頼により、夏季実技研修会を企画・実施。 【研修会内容：紙版を使用した凹版画の制作。版サイズ13.5×19.5cm、単色刷り。講師・当館学芸員、会場：版画工房】 ※この研修を踏まえ、区立お茶の水小学校で授業研究が行われた。5年生24人を対象に5時間の授業が実施され、そのうちの1時間(45分)が10/20(金)に公開された。	8/23(水) 13:30～16:30	7人	7人	—	500円
5	教員研修会等への協力	町田市立小学校教員	町田市公立小学校教育研究会 図画工作部 夏季実技研修会開催にあたり、講師の紹介、内容・進行に対する助言、会場利用に関する調整等を実施。 【研修会内容：講師・杉浦幸子氏による鑑賞学習の指導方法についてのレクチャー、およびグループワーク、図工教員31人参加、会場：講堂】 ※この研修会をきっかけに講師の杉浦氏が市立南第一小学校で鑑賞授業を11/7(火)に実施。5年生116人を対象に、アーティストの水上泰財氏、全盲の美術鑑賞者として活動する白鳥建二氏を招いた授業が2時間(90分)実施された。	8/25(金) 10:00～12:30	31人	31人	—	—
6	自由研究への協力	武蔵野市立小学校 3年生	冬休みの課題「昔の道具しらべ」(調査とスケッチ)において石版画印刷機を選択した児童が来館。版画工房のリトグラフプレス機をスケッチするとともに、制作工程や描画・製版・印刷に関する用具、画材について調べた。学芸員が説明。 会場：版画工房	12/27(水) 14:00～16:00	1人	1人	1人	—

3 他機関への協力

美術館や大学からの依頼を受けて、調査・研究活動に協力します。

	事業名	協力先	概 要	実施日程
1	「目黒区美術館コレクション展 版画いろいろ + 特集展示 秋岡芳夫全集6 銅版画」 への技法調査協力と資料貸出	目黒区美術館	出品予定の銅版画作品の技法調査(ステートの分類、技法の分析等)に協力し、4 版種の版や作例、制作道具類を貸出。技法解説資料として会場で展示された。また4 版種の技法紹介動画「版画のつくりかた」が上映された。	技法調査 8/30(水) 展覧会会期 10/7(土)～11/12(日)
2	「第90回記念版画展」 におけるイベントへの道具貸出	一般社団法人 日本版画協会	「第90回記念版画展」(10/8～22 東京都美術館)におけるイベントで使用する用具の一部(銅版画用腐蝕バット、彫刻刀)を貸し出した。 ①デモンストレーション「銅版画の実演」講師：若月公平氏 展示会場内 ②ワークショップ「木版画(拓摺り)公開制作」(講師：丸山浩司氏 交流棟スタジオ)	①10/13(金) ②10/21(土)
3	教育普及活動に関する現地調査	神奈川大学建築学部 建築学科	神奈川大学建築学部建築学科助教の吉岡寛之氏より依頼を受け、美術館における市民参加による活動の調査に協力。 【協力内容：創作に関する活動場所、家具備品についてのヒアリング、現地調査、木版画一日教室の見学】	11/29(水) 15:00～16:45 12/6(水) 14:00～16:00
4	教育普及活動に関する現地調査	日本大学大学院 理工学研究科	博士前期課程建築学専攻2年に在籍する学生の依頼を受け、「美術館における観客参加に関する研究」のためのヒアリング調査に協力。 【内容：ワークショップの内容とその活動の場、手法について】	2024年1/19(金) 10:00～11:00

4 作品展

講座で制作した作品による作品展を、館内の市民展示室等で開催します。

作品を展示する機会を受講生に提供し、「発表する楽しさ」を経験してもらうことを目的としています。

小中学校作品展では、美術館を会場とし美術館職員がかかわることで、より質の高い展示を目指しています。

	事業名	対象	概 要	会 期	出品状況	来場者数	うち小中学生	観覧料
1	夏期子ども講座作品展 「妖怪たちの音楽祭」展	どなたでも	夏期子ども講座(内容はp.40参照)の受講生と指導をおこなった東京学芸大学の学生による作品展。天井からTシャツを吊り下げ、扇風機の風によって揺れるように展示した。壁面には講座で制作した版画のほか、下絵用紙、制作についての感想文も展示。講座の様子をまとめた動画や制作手順の解説パネルを設置し、来場者に制作工程を分かりやすく伝える工夫をした。 会場：市民展示室	8/8(火)～12(土) 〈5日間〉	受講生29人(58点) 大学生16人(22点)	450人	111人(推計)	無料
2	第37回 町田市公立小中学校 作品展		町田市内の公立小中学校にかよう児童・生徒による作品展。子どもたちが授業等で制作した美術、図画工作、書写の意欲溢れる作品を展示し、日頃の学習の成果を発表する。 〈参加校〉町田市立小学校および中学校 〈出品作品〉上記学校の授業等で児童・生徒が作った絵画、版画、デザイン、ポスターなどの平面作品ならびに中学生による工芸、彫刻などの立体作品。および小学生の書写作品。 〈会場〉企画展示室1 〈主催〉町田市、町田市教育委員会、町田市公立小学校教育研究会図画工作部・国語部、町田市中学校教育研究会・美術部	中学校美術作品展 2024年 1/12(金)～21(日) 〈9日間〉	平面2,455点 立体1,047点 20校	4,893人	1,426人	
				小学校図画工作展 2024年 1/26(金)～2/4(日) 〈9日間〉	平面1,625点 42校	7,680人	2,869人	
				小学校書写展 2024年 2/9(金)～2/18(日) 〈9日間〉	3,322点 42校	2,340人	720人	

5 イベント、コンサート

気軽に参加できる様々なイベントを実施することで、より身近な美術館となるよう努めます。

	事業名	対象	概 要（敬称略）	実施日程	定員	参加人数	うち 小中学生	参加費
1	ブロムナード・コンサートⅠ 「音を楽しむ 自然と楽しむ」	どなたでも	「自然という書物 15～19世紀のナチュラルヒストリー&アート」展 関連催事 Duo Iris(デュオ・イリス) 〈真野 謡子=ヴァイオリン、後藤加奈=ピアノ〉 エルガー：朝の歌、ドビュッシー：美しい夕暮れ、サラサーテ：序奏とタランテラ ほか 会場：エントランスホール	4/29(土・祝) ①13:00 ②15:00 各回30分	①100人 ②100人	①100人 ②85人 (立ち見含まず)	①15人 ②8人	無料
2	ブロムナード・コンサートⅡ 「戦争と日常 音楽で描かれた情景」		「出来事との距離—描かれたニュース・戦争・日常」展関連催事 江澤隆行(ピアノ) モーツァルト：トルコ行進曲、 グラナドス：ゴイエスカスより 嘆き、 またはマハと夜鳴き鶯、 シューベルト(リスト編曲)：軍隊行進曲 会場：エントランスホール	7/16(日) ①13:00 ②15:00 各回30分	①90人 ②90人	①69人 ②65人 (立ち見含まず)	①5人 ②15人	
3	ブロムナード・コンサートⅢ 「音楽の世界を旅する」		「版画家たちの世界旅行—古代エジプトから近未来都市まで」展関連催事 町田市内の大学で音楽を学ぶ学生による声楽、器楽 ①玉川大学芸術学部 ベートヴェン：ピアノソナタ第23番・熱情より 第2、3楽章、C. シャミナード：コンチェルティーノ、N. A. リムスキー＝コルサコフ：トロ ンボーン協奏曲 ほか ②桜美林大学芸術文化学群 ドヴォルジャーク：スラヴ舞曲集より op.46-8ト短調、 ロッシーニ： オペラ「セヴィリアの理髪師」より 黙って、静かに静かに、ベッリーニ：オペラ「テンダのベアトリーチェ」より 私ひとりて ほか 会場：エントランスホール	9/9(土) ①13:00 ②15:00 各回30分	①100人 ②100人	①96人 ②100人 (立ち見含む)	①4人 ②5人	
4	ブロムナード・コンサートⅣ 「フルートとピアノで巡る 明治の風景」		「楊洲周延 明治を描き尽くした浮世絵師」展関連催事 河野彬(フルート)、高橋ドレミ(ピアノ) G. ビゼー：「アルルの女」第2組曲より メヌエツト(抜粋) モンティ：チャールダーシュ、滝廉太郎(矢代秋雄編)：荒城の月 会場：エントランスホール	11/4(土) ①13:00 ②15:00 各回30分	①100人 ②100人	①99人 ②66人 (立ち見含む)	①3人 ②5人	

6 版画工房・アトリエの一般開放

	事業名	対象	概 要	実施日数	定員	利用者数	使用料
1	版画工房・アトリエ の一般開放	版画制作経験者	版画工房とアトリエを開放し、創作の場を市民に広く提供。 各種プレス機、腐蝕施設、ローラー等の備品のほかインクなどが使用できる。 毎週木曜、日曜、月2回の火曜に実施。 9時30分～17時30分(9時30分～13時30分と13時30分～17時30分) 会場：銅版画、リトグラフ＝版画工房 スクリーンプリント、木版画＝アトリエ	年間124回	木版画 スクリーン プリント 2人 8人 6人 10人	銅版画 リトグラフ スクリーン プリント 計3 961人 288人 891人 851人 1931人	半日…1,250円 一日…2,500円

7 その他事業

	事業名	対象	概 要	実施日程	来場者数	参加費
1	第25回 ゆうゆう版画美術館まつり	どなたでも	友の会との共催事業。国際版画美術館を拠点に町田市内外に“美術を愛する人々の交流の輪”を拡げることが目的とする。木版画摺り体験、講演会、コンサート、ワークショップなど館内でさまざまなイベントを実施。町田時代祭り(10月22日)、文学館まつり(10月22日)、生涯学習センターまつり(10月21、22日)と同時期に開催 会場：版画美術館館内と前庭	10/21(土)、22(日)	5,924人	無料

1 版画講座



銅版画一日教室



リトグラフ一日教室



木版画一日教室



創作講座 リトグラフ



子ども講座① 「ちいさな本をつくる」



夏期子ども講座「妖怪たちの音楽祭」



子ども講座②—みてみてつくろう—
「キッチンリトグラフに挑戦 バターとコーラでみんなのまちを刷ってみよう！」

2 学校教育への協力



東京都立小川高等学校美術部



東京学芸大学教育学部美術講座



千代田区教育会図画工作部 夏季実技研修会



町田市公立小学校教育研究会 図画工作部 夏季実技研修会

3 他機関への協力



目黒区美術館 貸出資料(ケース内のアルミ版、刷り見本、描画材)の展示

4 作品展



夏期子ども講座作品展

第37回町田市公立小中学校作品展



中学校美術作品展



小学校図画工作展



小学校書写展

5 イベント、コンサート

プロムナード・コンサート



「音を楽しむ 自然と楽しむ」



「戦争と日常 音楽で描かれた情景」



「音楽の世界を旅する」



6 版画工房・アトリエの一般開放



版画工房

町田市立国際版画美術館 紀要 第28号

2025年3月28日 発行

編集・発行 町田市立国際版画美術館

〒194-0013 東京都町田市原町田4-28-1

TEL : 042-726-2771 / 0860

刊行物番号 24-63

製作 ニューカラー写真印刷株式会社

Machida City Museum of Graphic Arts

4-28-1 Haramachida

Machida City, Tokyo, Japan #194-0013

Edited and Published by Machida City Museum of Graphic Arts

Printed by New Color Photographic Printing Co., Ltd.